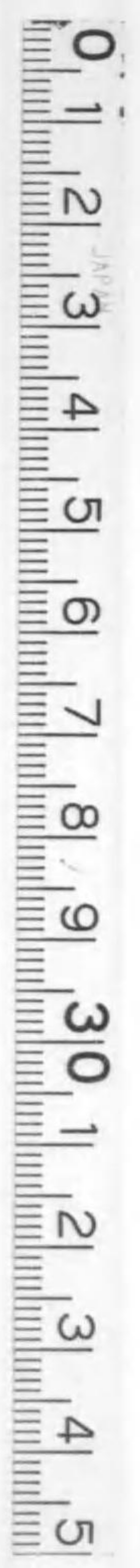


342
4614

事故本
PI461-1462
850.1



始



工 70 60

342
461A



阿波藩民政資料

(上卷)

大正
5. 12. 12
内交

緒言

阿波藩民政資料の編纂成り、茲に之を刊行して世に公にせむとす
阿波國は上古忌部氏の子孫開拓したる地にして歴史上の起原甚多しと雖も
南北朝以還、多くは戦亂の巷となり、民政上の遺制殆ど攷ふへからず、蜂
須賀家政封を此の地に享けてより、銳意産業の振興を圖り、歴世の藩主亦
深く茲に心を致し、治績漸く舉り、後人をして其の惠澤に浴せしめたるも
の尠なからず、而も此等民政上の事績は、多く年と共に湮滅に歸せむとす、
寔に慨惜の情に堪へず、嚮に大正二年阿波藩民政資料展覽會を開設し、蒐
集の資料を編綴刊行し、以て温故知新の料に資せしが、當時事卒爾に成り、
廣く蒐集の實を擧ぐる能はざりしものあり、然るに客年十一月 御即位御
大典を行はせらるゝに際し、此の曠古の御盛儀を記念せむため、年の十一
月十日より本年四月末日迄、徳島縣物産陳列場内に於て、民政資料展覽會
を開設することとし、御大典奉祝協賛委員會を設け委員を設置して資料の

編纂を爲さしめたり、而して其の出品総点数は四千八百餘点に上り、特に侯爵蜂須賀家より有益なる材料を出品せらるゝ等、極めて好成績を収むるを得たりと信す

顧ふに今回の出品は、古く南北朝、室町時代より近く廢藩置縣に至る迄、前後六百有餘年に亘り、文書舊記器具建築材料等の出品を網羅したるを以て、常に民政上の資料たるに止らず、歴史上考古上亦好箇の資料たるもの少なからず、故に民政上直接關係する所尠なきものと雖、特に之を陳列縦覧に供し、以て考古の参考資料たらしめたり、而して民政上特に参考に資すべきものは、謄寫撮影を爲し、茲に編纂を了したるを以て、其の顛末を敘述し之を卷首に弁す、覽者はによりて民政上に裨益する所あらば幸なり

大正五年三月

德島縣知事 末松偕一郎

報 告

御大典紀念阿波藩民政資料の編纂を了し候に付茲に閣下の劉覽に供し候也

大正五年一月

御大典奉祝協賛會

委員長 廣 瀬 直 幹

德島縣知事 末松偕一郎殿

例言

一本書編纂の方法は、曩に刊行したる阿波藩民政資料と、彼此参照に便せむため努めて之に倣ひ、各部共通なるものは之を蜂須賀家藩の政務等に收め、蜂須賀家入國以前に属するものは、各其時代に分ちて巻尾に蒐録したり。

一本書は主として民政上の参考資料を蒐録し、又關係の多からざるものと雖、當時の状態を窺ふに足るもの、又は民心の修養に資するもの、如きは、併せ之を收めたり、唯出品中既刊民政資料と重複するもの、及同一種類に属するものは、各目錄として章尾に添付したり。

一編纂の順序は年次に依り、年次不明なるも明治元年以前の事實と認めたるものは、慶應明治の間に挿入したり、蓋し藩の制度と維新後の制度とを混同せしめざらむ爲のみ。

一文書の題目は調査編纂の際之を附したるものにて、妥當ならざる

もの抄からさるべしと雖、今昔趣を異にし、適當の題目を附する能はざりしに因す。

一書中文字に△印を附せるは疑問、□印あるは原文の缺字を示せるものなり。

一資料の蒐集及調査編纂は左の如く委員を任命又は囑託し分擔整理せしめたり、特に資料の蒐集に際しては曾我部道夫氏の盡力に負ふ所多し厚く謝意を表明す。

委員事務分掌及氏名

委員長

内務部長

廣瀬直幹

副委員長

警察部長

大塚惟精

出品係

技師

住田史郎

技師

西田牧王

理事官

有吉實

工業技師

名倉政次

博物産陳列長

青木茂

属

豊崎長藏

属 庄野甚平

属 (兼)大西甚右衛門

技手(兼)佐藤重太郎

調査係

技師 梅木正衛

技師(兼)住田史郎

理事官 林恒四郎

技師 勝部彦三郎

理事官 堀口満貞

技師 鈴木敏夫

理事官 香川甚四郎

属 岡田九之吉

属 永田兵三郎

属 (兼)庄野甚平

属 松岡真平

属 都築賢一

警部 前田龜三郎

属 (兼)大西甚右衛門

技手 佐藤重太郎

囑託委員

徳島中學校教諭 岡本由喜三郎

撫養中學校教諭 森永吉

教師範學校 市川敏雄

高等女學校教諭 橋本龜一

徳島中學 小出 植男
 校野長小 田所市太

編纂係

技師 (兼) 住田 史郎
 林業技師 牟田 吉太郎
 技師 田澤 豊一
 属 宇野 小金次
 属 (兼) 庄野 甚平
 属 酒井 三次
 技手 兒島 静男
 属 大場 貞春
 技手 (兼) 佐藤 重太郎

校國府小學 長

近藤 辰郎

技師 芝池 眞吉
 技師 秦 一二郎
 農業技師 武富 憲時
 属 吉成 書三郎
 警部 吉村 十七夜月
 技手 天野 圓平
 技手 福原 誠三郎
 属 大西 甚右衛門

御大典 阿波藩民政資料 (上卷)

目次

阿波藩

蜂須賀家

古天主取潰申付御狀 一一
 家臣取糺に付申付御狀 一二
 失火見舞御狀 一三
 蜂須賀家居城及外廓 一四
 全山上建物配置圖 一五
 材木其他に付蓬庵公の書狀 一六
 蜂須賀家長遷院様御書軸 一七
 通船制道申付覺 一八
 御普請其他申付御狀 一九
 手長所藏符米に付申遺狀 二〇
 手前勘定濟開届書 二一
 薪人足等に付申付御狀 二二

對益田豊後守申聞書

益田豊後守借銀返辨申付書 二
 千松下總養育方申付御狀 三
 大工共へ申付其他に付御狀 四
 日損其他に付申付御狀 五
 加子屋敷に付申上書 六
 御婚禮役割仰付覺書 七
 御軍法御備定 八
 關所に付仰渡書 九
 御目見仰付覺書 一〇
 船法申渡覺書 一一
 御目見指延申上覺 一二
 御忌服月額割に付御觸寫 一三
 上意書寫 一四
 稻田家來學習院へ指出控 一五
 王政復古に付被仰聞御書付寫 一六
 御目見願上覺書寫 一七
 上下乗船人數等申付覺 一八

一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二

二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二

奥向取締申付覺
御作事申付定書
江戸へ召寄者共心得方申付覺
諸事起誓文之事
寄合之節料理出方申付覺
御目付衆へ上る阿波淡路兩國之事
江戸御屋敷之覺
送夫御元建之事
藩士家祿歩一之目
江戸火災に付材木取調申達書
地震に付手配申付覺書
稻田家臣上京御沙汰書寫
奥州出張戦争之趣屆書寫
稻田家主從所置始末
御關船並荷船石目積帳
年始御祝儀申上達書
年頭御祝儀申上名面指出達書
參考目錄

五 四 三 二 一 〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一

政 務

端山村諸事定條々
三好郡定書
政所其他へ申付御狀
隱居相望者其他に付申付覺
大工其他御作事御用に付申上覺書
在大阪申付に付覺書
走入等に付制札下付御狀
貞光代官取糺覺書
貞光山里政所其他定書
組中勤怠取調御狀
身上其他に付申付御狀
扶持其他申付御狀
走入に付御觸書寫
諸公事出入寄合僉議申付覺書
諸事申付書寫
居屋敷差遣に付御定書
家中侍其他諸事御定書

二二二 二二四 二二五 二二六 二二七 二二八 二二九 二三〇 二三一 二三二 二三三 二三四 二三五 二三六 二三七 二三八 二三九 三〇〇

公儀御普請其他に付御定書
江戸番之者借銀覺書寫
撫養渡海其他定書
安宅御奉行申付覺書
公儀御法度其他御定條々
渭津山下廻市町中申觸覺
留守中諸事申付覺
土地賣買御定書寫
年頭御祝儀其他に付申付覺
町奉行定書
讚州御領分より參者に付覺書
諸事御定十一個條覺書寫
下屋敷横目申付覺
藏入並新開等に付申付覺
諸公事裁許申付覺
他所有之諸親類往來之定
諸親類往來之定
阿波郡奉行之覺

一四三 一四二 一四一 一四〇 一三九 一三八 一三七 一三六 一三五 一三四 一三三 一三二 一三一 一三〇 一二九 一二八 一二七 一二六 一二五 一二四 一二三 一二二 一二一 一二〇 一一九 一一八 一一七 一一六 一一五 一一四 一一三 一一二 一一一 一一〇 一〇九 一〇八 一〇七 一〇六 一〇五 一〇四 一〇三 一〇二 一〇一 一〇〇 九十九 九十八 九十七 九十六 九十五 九十四 九十三 九十二 九十一 九十 八十九 八十八 八十七 八十六 八十五 八十四 八十三 八十二 八十一 八十 七十九 七十八 七十七 七十六 七十五 七十四 七十三 七十二 七十一 七十 六十九 六十八 六十七 六十六 六十五 六十四 六十三 六十二 六十一 六十 五十九 五十八 五十七 五十六 五十五 五十四 五十三 五十二 五十一 五十 四十九 四十八 四十七 四十六 四十五 四十四 四十三 四十二 四十一 四十 三十九 三十八 三十七 三十六 三十五 三十四 三十三 三十二 三十一 三十 二十九 二十八 二十七 二十六 二十五 二十四 二十三 二十二 二十一 二十 十九 十八 十七 十六 十五 十四 十三 十二 十一 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

御國奉行申付覺書
先規奉公人役勤御觸寫
庄屋五人組賄並割符等御觸寫
村中割符其他申開書
賣地讓地證文與書定御觸寫
御制禁御觸請連判狀
鉄炮打人夫賃銀扶持方割付帳寫
御巡見使御出に付取調達
御巡見使御出に付村方心得
御巡見使諸案内方心得
御巡見使御出に付御觸寫
御巡見使行列書
御巡見使諸入費割符
藥草御用人取扱向達書
杜秤其他申渡覺書
飯料麥其他申聞覺書
夫仕方取究端書覺寫
往還其他諸事仰出覺書寫

一七五 一七八 一八二 一八六 一九三 一九四 一九六 二〇二 二〇三 二〇五 二〇六 二〇七 二〇八 二〇九 二一〇 二一一 二一二 二一三 二一四 二一五 二一六 二一七 二一八 二一九 二二〇 二二一 二二二 二二三 二二四 二二五 二二六 二二七 二二八 二二九 二三〇 二三一 二三二 二三三 二三四 二三五 二三六 二三七 二三八 二三九 三四〇 三四一 三四二 三四三 三四四 三四五 三四六 三四七 三四八 三四九 三五〇 三五二 三五三 三五四 三五五 三五六 三五七 三五八 三五九 三六〇 三六一 三六二 三六三 三六四 三六五 三六六 三六七 三六八 三六九 三七〇 三七二 三七三 三七四 三七五 三七六 三七七 三七八 三七九 三八〇 三八一 三八二 三八三 三八四 三八五 三八六 三八七 三八八 三八九 三九〇 三九一 三九二 三九三 三九四 三九五 三九六 三九七 三九八 三九九 四〇〇

道夫差出覺書	二七六	藩政時代行政司法の狀態	四三
家中相續並流浪人に付覺書	二八〇	庄屋勤方の概略	四三三
御手當願上覺書並手當金下置達寫	二八〇	留守居役制度の概要	四六〇
時勢變遷に關する演述寫	二八二	町會所の一斑	四七〇
藤制改革一件之達	二八七	藩政の醫師と學校	四七二
諸紙元結等算用書	二九四	御作事方と定普請組	四七五
人材登庸に付申達書	二九六	御廩制度	四七八
筆算相應之者取調書	二九七	舊藩の御飛脚	四八二
町内掃除御觸並請書	二九六	舊安宅御船方の一卷	四八五
役場變更御觸請書	二九九	弓組制度並弓師事跡	四九〇
揖取舟搜索方御觸書	三〇一	御鉄炮鍛冶の概畧	四九二
兵隊解放筒返上申付觸書	三〇三	御使者宿の制度	四九四
目安諸紙面取調及奥書に付御觸	三〇四	參考目錄	四九六
官名通稱之者名替並開講御觸	三〇六	狩	
出火見分糺方心得	三二〇	獵	
將卒役令	三三三	鉄炮に而鳥取義制禁村々並指免村々	五〇九
將卒役令	三三三	勢子狩人御扶持方定	五二〇
將卒役令	三三三	御鷹野擲御法度書寫	五二〇
將卒役令	三三七	鷹住吉の圖	五二一

諸鳥捕獲禁止覺書	五二一	扶持給與申付狀	五四三
諸鳥捕獲禁止覺書	五二三	紺屋役申付に付御沙汰書	五四五
諸鳥捕獲制禁御觸寫	五四四	御沙汰書	五四五
諸鳥捕獲御法度覺書	五五五	出羽大島番勤御沙汰書	五四七
御留野諸制道申付覺寫	五五六	手長所申付覺書	五四九
御鷹方に付申上覺	五五七	歩一申付御沙汰書	五五〇
撫養御狩一卷	五五九	知行差遣狀	五五〇
御留野制道御請書帳	五二九	柴山御番被仰書	五五〇
御鷹の取行	五三三	高取列申付沙汰書	五五〇
參考目錄	五四〇	廻狀持加役仰付御訴	五五一
任用服務		身振願覺	五五二
任用身居		小高取申付覺書	五五五
知行讓渡開屆書	五四一	與頭庄屋申付覺書	五五八
紺屋役夫申付御狀	五四一	觸使身居に付御觸寫	五五九
紺屋灰に付御定書	五四二	小高取申付覺書	五六一
知行御下知狀寫	五四二	苗字帶刀指免覺書	五六一
扶持差遣書	五四三	苗字袴差免覺書寫	五六一
		苗字帶刀心得書	五六三

苗字帶刀夫役指免狀
 二字帶刀願上書寫
 一家成立申上覺
 居役人格仰付書
 細着用御免書
 入國當時藩士祿高
 官祿定則
 藩制に付分限解放申付書
 村役人解放觸書
 里長其他給祿表
 身居人觸放申付書
 座頭の制度
 祿制一班
 藩士の譜代家來解放始末
 參考目錄

五四
 五五
 五六
 五七
 五八
 五九
 六〇
 六一
 六二
 六三
 六四
 六五
 六六
 六七
 六八
 六九
 七〇

人足御當置米仰付定書
 肝煎勤方申付書
 庭役人勤方
 御馬御用勤方記録
 社寺宗教
 社寺
 豊林寺境内社領並禁制
 南方四郡聖家へ申付狀
 大工宮式作法申上書
 持明院堺内竹木伐取禁制札
 燒山寺堺内竹木伐取禁制札
 切支丹宗門禁制札
 宗門改に付代換誓紙
 門首門下出入裁許覺書
 澁野村新藏院へ申渡覺書
 大山權現舊記取調申上書
 願書直當指許書

六一
 六二
 六三
 六四
 六五
 六六
 六七
 六八
 六九
 七〇
 七一
 七二
 七三
 七四
 七五
 七六
 七七
 七八
 七九
 八〇
 八一
 八二
 八三
 八四
 八五
 八六
 八七
 八八
 八九
 九〇
 九一
 九二
 九三
 九四
 九五
 九六
 九七
 九八
 九九
 一〇〇

諸寺院僧侶風儀取究申達書寫
 蓮花寺修繕願書
 天神本社修覆御下知書寫
 半鐘倒木取調申上書
 御添簡願上覺書寫
 野諷經勤行願上書
 八幡宮神體取調書
 遊行上人廻國に付觸書
 杉尾大明神舊記
 寺名取調申上書
 神社併合に付申付書
 祭資寄進狀
 參考目錄

六二
 六三
 六四
 六五
 六六
 六七
 六八
 六九
 七〇
 七一
 七二
 七三
 七四
 七五
 七六
 七七
 七八
 七九
 八〇
 八一
 八二
 八三
 八四
 八五
 八六
 八七
 八八
 八九
 九〇
 九一
 九二
 九三
 九四
 九五
 九六
 九七
 九八
 九九
 一〇〇

宗門替誓文
 吉利支丹宗門御改申開覺寫
 宗門誓詞條目
 洪水死亡者供養に付御觸
 參考目錄
 學術技藝
 學術技藝
 學制意見書寫
 劍槍稽古存志申上覺書寫
 勸學篇
 土地測量義申上書寫
 郷學入學獎勵御觸並請書
 徳島藩學事之略
 參考目錄
 治安風俗
 治安

六九
 七〇
 七一
 七二
 七三
 七四
 七五
 七六
 七七
 七八
 七九
 八〇
 八一
 八二
 八三
 八四
 八五
 八六
 八七
 八八
 八九
 九〇
 九一
 九二
 九三
 九四
 九五
 九六
 九七
 九八
 九九
 一〇〇

百姓逐電其他覺書 七三九
 外國船に付申付御狀 七三九
 外國船御手當に付申付御狀 七四〇
 外國船手當に付御狀 七四一
 松平右京様被合仰條數々寫 七四二
 走人取遣之義相定條々 七四五
 走人取遣に付御定書 七四七
 博奕法度申付覺書 七四八
 奉公人侍取締其他定書寫 七四九
 捨子制禁御觸書 七五〇
 他國者取締御觸並請書 七五一
 穢多非人取締御觸請書 七五二
 追放人無手形者等宿泊差留御觸並請書 七五七
 強訴徒黨御制禁觸書 七五八
 立退百姓歎願覺書寫 七六一
 土州脱走人引渡模樣 七六六
 出火之節丁々目印道具申上覺書寫 七七七
 町預け不心得者に付願上覺書 七七八

他所人諸浪人改方申付覺 七六一
 かるた商差止御觸 七六二
 出火に付御注進申上覺書控 七六三
 牢中拔出才判申付覺 七六四
 四國遍路体之者取締申上覺 七六六
 開港之注意御箇條書 七六七
 他國物御究御書付寫 七九三
 虛無僧取究御觸寫 七九八
 在方之者指辰並取締方御觸寫 八〇〇
 盜賊訴出御觸寫 八〇四
 不審物取糺並番非人夜廻に付觸書 八〇五
 徒刑人鬢髮刺に付觸書 八〇七
 雪洞朱紋朱紅色取指留觸書 八〇八
 博奕並胡亂者取締申付書 八〇九
 參考目錄 八一〇

風俗
 刀脇指其他制禁に付覺書 八一五
 衣類着用御觸 八一五

阿波大踊繪圖 八二七
 白足袋着用方に付御觸 八二九
 大守乗船並白足袋日傘指止觸書寫 八三一
 衣裳俄差止御觸請書 八三三
 市中盆踊に付御觸寫 八三五
 盆踊に付心得方御觸寫 八三八
 藝子体の所行差留御觸寫 八三〇
 女髮結差留御觸寫 八三一
 風俗取調御答の寫 八三二
 盆踊見物差留並移住に付達書 八四三
 市中店方風儀改方通達書 八四四
 道路通行心得方御觸並請書 八四七
 日笠指留觸達 八四九
 男女混浴指留御觸書 八五一
 遊廓取立市中遊所指留觸書 八五三
 參考目錄 八五四

救恤
 痢病流行に付御手當一卷 八五七
 困窮者御糺に付申上覺 八六四
 御手當金借用受取 八六六
 困窮人救恤願書 八六八
 御米拜借願上覺 八八三
 赤麥御拂下願上覺 八八五
 救恤金借用証文 八八七
 年貢當置米達書 八八七
 高齢者取調指指出方達書 八八九
 參考目錄 八九一

恩賞
 仁宇大粟百姓非義取鎮威狀 八九三
 仁宇逆心者取鎮威狀 八九三
 五人與褒賞寫 八九四
 盜賊吟味褒賞 八九四
 孝子賞狀 八九五

救恤恩賞

商賣正直に付褒詞
御用船救難出勢
學問所褒美辭令書
年貢上納褒詞
乾元丸廻航褒賞
孝子褒賞狀
年貢皆濟褒賞
東端山村民褒賞
勸農出精褒賞
御用船難船救助御謝禮
御用船救難出精褒狀
御年貢上納褒狀寫
乾元丸廻航褒賞
組頭庄屋申付並褒狀
御用銀指上に付褒詞
延米不願出に付褒賞
精勤に付褒賞
孝子褒賞

八九五
八九五
八九五
八九五
八九五
八九五
八九七
八九八
八九九
九〇〇
九〇三
九〇四
九〇五
九〇五
九〇六
九〇七
九〇八
九〇八

年貢皆納褒賞
證書差上に付褒賞
御年貢上納褒詞
御年貢皆納褒狀
參考目錄

勤 儉

次類食事其他節約請書
天保飢饉當時の物價調
儉約仰付御請書
儉約向申達寫
儉約に付御觸請書
儉約御觸並請書
御一新に付衣食住節約御達寫
參考目錄

土地 治水 地

九〇九
九一〇
九一〇
九一一
九一一
九一五
九一七
九一七
九二〇
九二三
九二六
九二九

檢地に付申付御書
檢地に付申付御狀
檢地に付申付御狀
檢地其他に付申付書
川除堤其他に關する制札
慶長八年椿村檢地帳
天正十七年喜來村檢地帳
天正十七年中島村檢地帳
慶長九年入田村檢地帳
檢地に付諸事申付御狀
淡州檢地申付御狀
牛牧を富岡と改稱申付御狀
てこ木其他對符申付御狀
御鉄砲御殿田地被下覺
三名道筋覺
新開田地に付御觸寫
拜地田畠埋上に申付書寫
椿地村新田指出覺書

九四一
九四一
九四二
九四三
九四三
九四三
九四三
九四四
九四四
九四五
九四五
九四五
九四七
九四七
九五〇
九五〇
九五二
九五二
九五三
九五三
九五五
九五五
九五五

溜床開戻願上覺
島地下渡覺書
散田に付御記録達書寫
散田差遣覺書
散開に付申達覺
名田下札
散田下札覺書
空地差遣方諸窺
新田築立下札
散田落札覺書
召上地拂下名居下札證
大水に付御注進願寫
新田築立其他仕居方寫
隱田畠取調御觸寫
港口幅奥行町數調
土地檢見に付相談株書寫
損田願上書
御檢地一卷

九六一
九六四
九六六
九六七
九六八
九六九
九七一
九七二
九七二
九七三
九七三
九七五
九七八
九七八
九八〇
九八一
九八一
九八二
九八三
九八六
九八六
九八八
九八九

諸見分一卷並雜錄
拜地手引草
參考目錄

103
104
110

參考目錄

11

136

治 水

大原堤覺書
堤川除修繕並杭木笹竹伐取御觸寫
第十關出來申傳運記錄
吉野川流材御制道請書
土州銅山並材木に關する記錄
吉野川流材制道達書
吉野川流材事件談判日誌
鮎喰川普請御積總辻高書上寫
勸農御普請に付願上寫
惡水吐川浚堀廣申上覺
川浚手傳人夫割付帳
檜材川下御斷仰立御一卷控
水防竹藪植付願上覺書
川筋往還修繕自力出精御請書覺

114
119
120
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500

御大典
念記

阿波藩民政資料

(上卷)

蜂須賀家

古天主取潰申付御狀

(侯爵蜂須賀家所藏
御代々御書寫中抄出)

急度染筆候仍山之古てんしゆとりこぼし候間手傳人之儀のはりさし長柄之者一人も無相違召連罷
出早々とりこぼし材木は對馬家之東に可積置候能入念壹本もうせ候はぬやう可仕候聊以不可有油
斷候謹言

十月十四日

阿波守(花押)

井後新次郎とのへ
青山勝藏とのへ
梯九藏とのへ
梯三藏とのへ
太田彦兵衛とのへ



二
（侯爵蜂須賀家所藏
御代々様御書寫中抄出）

家臣取札に付申付御狀

尙々具に口上に申含候以上

於此方可申聞之處彼是取亂令失念候仍其方普請組若衆共事小身故候哉軍役一切不相成其上一圓見
苦敷仕立にて侍共不見分跡に候雖然彼者共心底は我より高給之者も同前に相心得諸事に付而其勤
のみに候間とかく拘置失堅計に候去春暇を遣へき覺悟に候へ共其節は世上ひつはく時分いつかた
へ相越候共路錢以下可致迷惑と存夏所務相納以後可申出と存令延引候只今此紙面之通具に申聞せ
候岡本左兵衛事先爭少忠節之筋目候つる間無其煩候相殘者共知行相放候秋所務其方と代官可被納
置候右之者共暇を遣上は在所付に堪忍候はんも又いつかたに主取仕候はんも其身次第に候聊相構
事不可在之候條此旨具に可申聞候謹言

月十七日

家 政（花押）

岩田五左衛門とのへ

（侯爵蜂須賀家所藏
御代々様御書中抄出）

失火見舞御狀

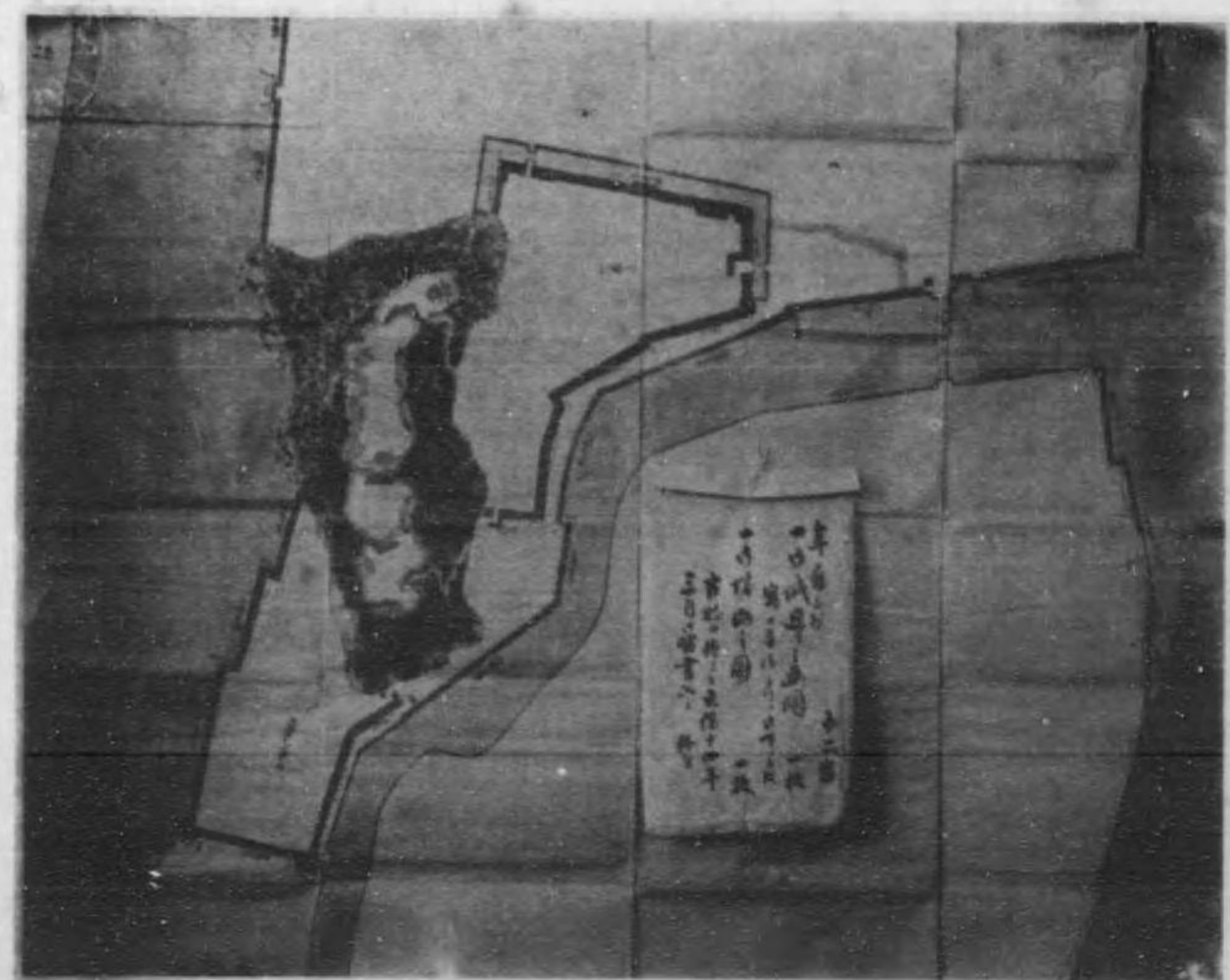
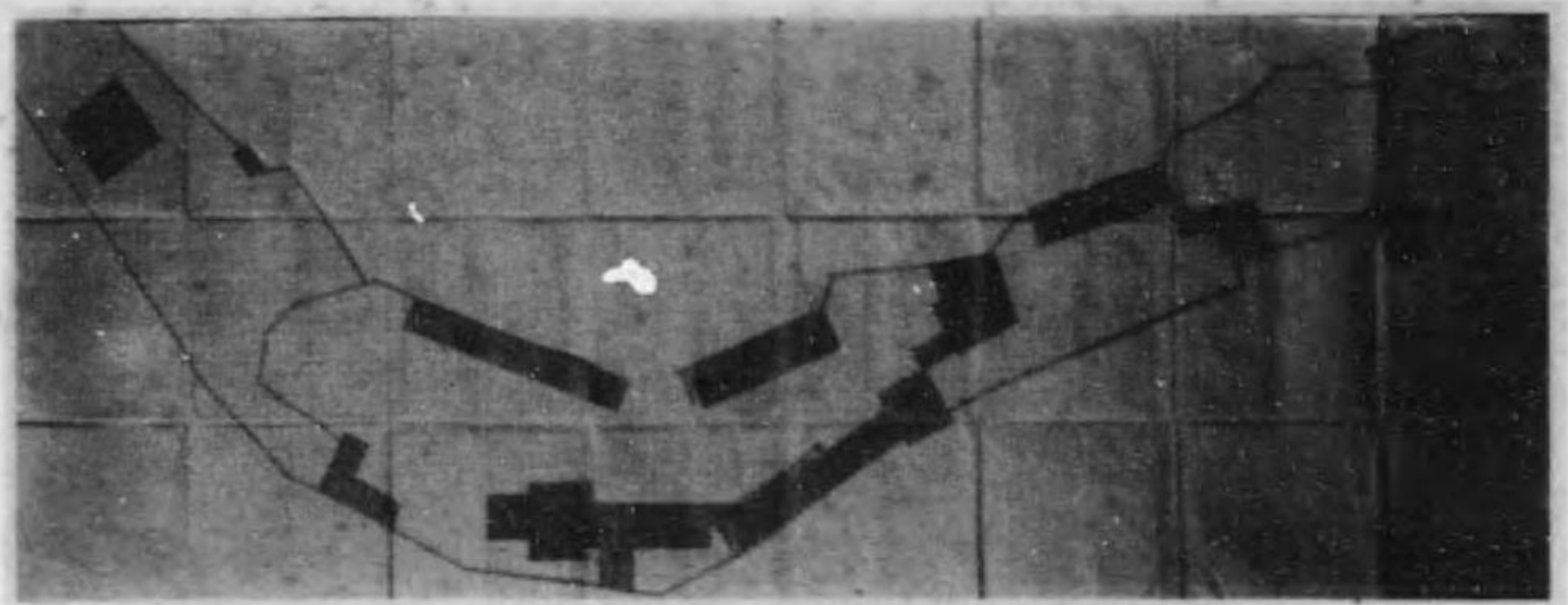
以上

蜂須賀家居城及外廓

（侯爵蜂須賀家所藏）

全上山上建物配置圖

（侯爵蜂須賀家所藏）



雜居實業區城及伏瀨

(繪自雜居實業區圖)

全土山土藝附屬圖

(繪自雜居實業區圖)

材木其他に付
蓬庵公の書状

(徳島市
佐香源一氏所藏)

道而其元材木商賣者手前も
改可相尋候 以上
治部左衛門方へ紙面の旨令承
知候内々申聞候槍七寸角三間
木ふしなしの事大木の内を系
らみ作候はし可有之かご存由
令満屋候彌せん方へ申候て爰
元可申越候才田百姓等扶持
方の事則彌五左衛門方へ申道
候其心得尤にも存候

ほうあん

(花押)

八月廿三日

蜂須賀良遷院様
御書軸

(徳島市
博多濱吉氏所藏)

一正道第一の事は申に不及事なれ
ども其中にも又他國へ懸はなれ
て役儀を勤るはたごへは大段な
れば京都大阪之一体之人氣風俗
阿波淡路阿國の人氣風俗を能
心に體置候事又時宜時風之變
をも加へ扱第一に目指候所は言
に不及正道を混本として又手代
始下役或は町家之用達等にも隨
分慕ひ思はれなから又深恐れら
れ又深恐れられなから慕ひ思
はれ下役初も無作ごしたる事な
ども出来ず不正々間敷事候も自
然と恐止り候ご申様之見當を第
一に心得扱自分の勤候所茂隨分
正道を第一として物ごと餘り恐
怖の意なく随分心一杯之所を時
宜時風之斟酌を加へ相勤ご申
す第一之見當たるべく誠に候事

今度椿浦火事行候由時分柄下々迷惑令推察候先々小屋懸之用意最も肝要候次爲祝義甚五郎方へ雖
五甚五兵衛方へ鳩五相贈候目出度可有賞翫候敬具

十二月廿七日

はう巻

宗一(御印)

森 甚五兵衛とのへ

同 甚五郎とのへ

通船制道申付覺

覺

(候爵録須賀家所藏
御代々様御書寫抄出)

一 撫養北泊上下之舟相改一切通被申間敷候殊上舟堅可被留事肝要に候上下之舟両口へ來次第日々
帳を付可置候後々可達上聞候事

一 舟留可申付旨被仰出通並本多上野介殿板倉伊賀守殿御両所之折紙之趣往還之舟に申渡少も事不
出來様に隨分納得にて舟可指戻候萬一御法度を背罷通舟も候はと不及申成次第留可被申候
一 若々大鳴門を落令通路舟も候はと成次第可被相留候天氣盪風によ不相叶舟は可爲其分候両口日

夜番堅被申付候儀專一に候者也

慶長十九寅十月廿八日

至 鎮(御判)

益田壹岐守ごのへ

以上

急度申遣候其口船留之義付而本上野殿重而被仰候は江戸に罷戻諸國石船無異儀可相通旨被仰候但船中相改不審成石舟は通申ましく若女わらんべなどのり候はく留置急度可申越候大事之義候間能々相改尤專一に候勿論のはり舟之儀は何舟にても一切通申間敷候謹言

十一月八日

阿波守至鎮(御判)

御普請其他申付御狀

以上

(候時録須賀家所藏
御代々様御書寫下抄出)

態染筆候

一 爰元御普請近々出来之跡に候先書にも如申遣爰元にて過分に借銀候歸國否銀子可指下候條所々
か運上之銀子當半年分少も不殘可執立置候尤油斷有ましく候米も何程うり拂候哉當年は扶持方

一 圓入間敷候條去年之殘米悉皆銀子に仕手廻尤候

一 此狀參着次第去年之殘米を以て千石と都合渭津町中へ可相渡候代銀は拙者歸國まで其沙汰有間敷候先年町中より拙者手前へ取替たる銀子もし其心あて旁に候條千石之都台急度可相渡候聊油斷有ましく候

一 大坂太之助手前之分一並四軒之銀子は何も宗味へ相渡はつにて候可得其意候

一 留守中關船少々可申付由十左衛門に申置候其以後終に何共不申越候其のみ不成分一之銀子藏米之儀も何共不申越候油斷に候歸國否過分之銀子可入候條可被付其意候

一 畑柿原にう田之茶屋去風雨に破損候はとつろひ普請可申付候色々運上之銀子藏米之儀油斷有ましく候謹言

八月十二日

あわ

至 鎮(御判)

武市拾左衛門ごのへ

篠山 加兵衛ごのへ

太田 勘四郎ごのへ

九

手長所藏符米に付申遣状

(侯爵蜂須賀家所藏
御代々様御書寫中抄出)

一〇

急度申遣候岩田七左衛門手長所の藏も符切米百石出事候間早々其元より罷通右のことく仕受あこ
に此より付候て可有歸宅候何も別而急にて候間辛勞なから精を入肝要候謹言

壬四月九日

はうあん

宗一(御判)

井村長三郎とのへ

手前勘定濟聞届書

(侯爵蜂須賀家所藏
御代々様御書寫中抄出)

以真

其方手前勘定方元和九年並寛永元年兩年分悉相濟也以手長所藏米並夏麥共也

寛永二年九月廿五日

宗一御判

田所以真

其方手長所寛永貳年分勘定開届相濟候也

寛永四

御印

三月十九日

田所以真

薪人足等に付申付御状

(侯爵蜂須賀家所藏
御代々様御書寫中抄出)

以上

名東郡市宮仁宇田下町大粟下山へ罷入薪仕人足並馬來正月月初而札山に申付候馬一疋年中米壹
斗貳升人足覺人に米六升如此加藤太兵衛青野二郎兵衛申付候條得其意百姓等堅可申付候右何も鎌
に而仕薪に而候上きなは令停止候可得其意者也

寛永三

宗一(御印)

十二月三日

長井梅林

對益田豊後守申聞御書

(侯爵蜂須賀家所藏
御代々様御書寫中抄出)

對益田豊後守申聞條々

一去年我等江戸出國之刻今度改而申付國奉行之者共に申付國中之士民等迷惑仕族候は、不限藏納
給所道有事とは承届令便いひ所へは或令扶持か或いか様之道にてもれんみんを加候様にと申付

在々廻し候所に海部郡之内豊後守知行所之百姓共不應所に處務不應身に役義等申付故年々年つ
 まりがしに及由にて數ヶ條之目安指上候其外近郷之者まで豊後守申付様無理非道之由迷惑申様
 之目安之面一二に候右之目安共只今指遣候間具に可有披見候愚成言事ながら左様之處務方少も
 不存我等見届候にも世に亦例も有間敷哉海部郡之義は大分豊後守知行所の事に候間たごへは我
 等不存族にて藏納に迷惑仕子細候共我等へ相伺豊後守爲覺悟よき様に引直し百姓之たごすみも
 事成候様に可申付道こそ本意にて候に國中之百姓共對給人何之申分も無之に豊後守一人之爲覺
 悟件之仕合中々絶言語候右之國奉行之者共不申付此以前之通に有來候て公儀 上使之御衆於御
 渡海者彼地にて直に目安を指上候はる有のまゝに可被達 上聞候然時は忽我等身上之大事にも
 可罷成候所に天道に相叶御國廻衆御越無之以前に聞届及沙汰義に候其上先年もヶ様之義にて百
 姓共申分に及候度々如此之仕合不及是非候剩去秋之頃豊後守百姓分八九十人に及令ちくてん候
 所に松平土佐守殿家來衆取扱にて歸參仕由に候勿論豊後守に不限五人十人失走の例は不珍候へ
 共無理非道之族にてもうせい如此之段他國之聞前代未聞之次第ひとへに阿波守ちしよくと存事
 一右之趣蓬庵公被聞召届益田主殿助森左太右衛門を以御内意被仰聞之由傳聞候其刻豊後守申分も
 於有之には幸と存右兩人を以蓬庵公へ段々御理をも可上處に不及其義數年百姓のそせう之通只

今行當下にて役義等指免族は豊後守も不成道義を申付と存わきまへ右之仕合と聞届候然上は可
 遂せんさく子細にあらず候條向後對面有之間敷事

一豊後守家來之侍横井十兵衛と申者先年於大坂表軍中無比類由にて義傳勘定を被遣置侍之義に候
 然を□□一禮も無之數年すておき剩妻子を可有力も無之様に仕成去々々候や終に追失候雖然
 何程之忠功之者に候共主從之間其身之覺悟により或せいはひ仕か或せつかん仕間敷にもあらず
 候併義傳軍中不愚成由にて墨付をも被遣置侍の事に候間いか様之子細を以家來をはなし候との
 義我等へ一往可申理子細に候に終に不及異義候は主りよくにのみふけりおこの道にもごんち
 やく無之かうおくの着別をも不辨豊後守に過分之知行遣置義ひとへに國家之ついで對我等に不
 義第一と存事

尙山崎圖書助吉岡勘兵衛口上に可申候也

寛永拾年二月廿五日

忠 英 (花押)

稻田修理殿

賀島主水殿

池田内膳殿

中村 若 狹 殿
長谷川 越 前 殿

一四

益田豊後守借銀返辨申付御狀

(侯爵蜂須賀家所藏
御代々様御書寫中抄出)

尙々此段否急度返事可被申越候隨其心得可有之候

追而申遣候豊後守去々年之暮爰許逗留之刻於京都借銀仕度候間袖借し候様にと申に付而判紙遣候然共銀子之高町人之手前何程に仕置候哉其後終に我等方へ何共員數不申聞候此度大津平田爰許へ下候而申候者我等用所之様に其刻申候に付而取替候其段我等方は可申理旨内々申様に聞傳候左様候へは事見苦候間其旨豊後守に兩人被申聞急度返辨候様に尤候万一何角さとはり候はと蓬庵公へ御六ヶ敷御座候へ共様体得御意尤候也

五月 廿 日

忠 英

稻 田 修 理 殿
池 田 内 膳 殿

千松下總養育方申付御狀

(侯爵蜂須賀家所藏
御代々様御書寫中抄出)

覺

一千松下總幼少之義候間万事氣隨に無之様に折々心付肝要之事

一 付置侍共對千松下總庵相に仕者有之者其方令異見其上にても承引不仕もの候はと内證我等へ可申聞事

一 兄弟之子共へ町人以下目見仕義大体之ものは不入事候乍去由緒有之者か又は年來立入仕るものは可任時宜候其節かろき持參之物は可納候此段時に至りて相斷候はと首尾もあしく候はん間幼少之子共に候之條進物なごは無用たるべき由兼々沙汰尤に候御旗本衆並他家之侍共音信持參物之義是又時にしたかひ品により可請事

一千松何方へ參候共其方供可仕候勿論御見舞衆有之刻者罷出馳走振之体尤肝要之事

一千松大分之調物仕候へご奉行に申付候共當時不入道具か又者國元にても有之物は無用之由可有

異見事

一方々へ音信之事遣候はて不叶方候はと森夫左衛門令談合時宜可相勤事

一 兄弟之子共方へ何方か御音信候共返禮仕義不入義に候我等に爲申聞候はと可遂一禮事

一五

- 一 千松方をいつれへ成共使者進候刻不及言歴々衆へは其方可罷越候少々の方へは相計申付可遣事
- 一 千松へ奏者之儀侍分は大形其方取次尤候出家町人にては始而禮を申刻者其方可取次候かろき町人奏者之儀其方可致指圖事
- 一 兄弟之子共いつれへ振舞に被召寄候共御断を申參間敷候乍去松平相模殿小笠原右近殿之一家水野出雲殿此衆へは可參事
- 一 兄弟之子共へ誰によらず目見仕度由案内有之者袴を令着對面尤候其節小姓共不行儀に無之様に常々堅可申聞事
- 一 何にても見物ものゝ義町方より召寄義堅無用候併門外などへ來り當座之見物に呼入義不苦事
- 一 千松下總いづれへなり共物見に參義堅供仕ましく候乍去一門中へ被召寄慰見物之儀は可爲各別事
- 一 近所火事之刻晝夜にかぎらず奥次之間まで罷越千松下總令供火本並風により兵部殿相模殿出雲殿小石川右四ヶ所へ供可仕事
- 一 万事其方一人之爲覺悟難計儀は森夫左衛門岩田監物に可有内談事
- 右之旨堅相守違背有間敷者也

寛永十六年六月六日

忠 英 (花押)

寺澤式部どのへ

(勝浦郡 日比野參次氏所藏)

大工共へ申付其他に付御狀

急度申遣候依御成近 成候此義大工共へ申付早々可指登

一 かけごしたい

五 十

一 すくごり

十 五

一 □□さし手をつけさせてありきるやう可申付候大さ壹尺五六寸四方に高さも□程によし

一 あんごん

大さ一尺四方

三拾可申付候うへのどつては竹をわけて□□いつれもく檜之木板可然候無油斷申付來十日時分可指登かけ五だいはや出來候はる早々可指登候行燈も其次に可入候

一 右之道具申付大工

次第檜木にても松にても四人つめのふる一ッ可申付此方へ可取登旨急

度に候謹言

十月廿七日

(花押)

一八

川崎作兵衛殿へ
日比野殿へ
梶浦殿へ

日損其他に付申付御狀

(侯爵須賀家所藏
忠英様御書寫上抄出)

尚々家中たし米之義米何程可在之も不知候に付米無之候は、銀子に而相渡候様に尤候以上
岩田與三右衛門差上セ候間申達候御國廻 上使衆四國邊御渡海之義五月時分たるへきやうに相
聞へ候就而は其元用之義大形與三右衛門申含候其内聞合追々可申遣候
一去年國中日損に付而諸給人令迷惑候由内々令承知候に付而在に相改候様に、最前申遣候二ッ成
にたらざる者手前淡州之給人とも同前に二ッ成たし米可申付候
一家中役義御普請入用之内三分二相遣に付而京都四百貫目之借銀利足毎年指上候雖然辰之年御普
請以前之役人無役之様に有來候左候へは家中役義高下在之事情間年々諸役何も同前に有度事候
其以前之役目之ことく可在之候哉左候は、四百貫目の銀子町人手前我等方々請合可申候此旨達

施公へも可被申上候具與三右衛門口上に申含候

一家中縁邊之儀我等方々可申付之由去年申觸書付請取置候へ共何角事多候へは相延候成人の子共
持候者共待兼可令迷惑候間面々存寄處我等指圖不相待候共申聞尤候隨其可令差圖候此旨侍中へ
可被申聞候他國へ縁邊の儀は身上の不寄多少曾無用に候是又口上に申含候謹言

正月廿二日

阿波守(御判)

稻田修理亮殿
賀島主水正殿
池田内膳正殿
益田豊後守殿
中村若狹守殿
長谷川伊豆守殿

加子屋敷に付申上覺

加子屋敷被下に付申上る覺

(飯野郡
森殿則氏所藏)

一高麗御陣之時別宮浦加子之内拾三人御船頭に被召出黒船車關さし板作り大船へ被仰付其外別宮
 之加子は御坐舟御組付被成候其節益田因幡殿を政所藤左衛門御陣中之御吉左右立聞御注進可申
 上旨被仰付其儘出船仕候處頓而なこや沖に而熊谷半次郎殿がくなみ敗軍之爲御注進御歸朝被成
 候御船におしあひ御陣中之御様子具に被仰聞通儘に書付因幡殿へ指上申御事
 一せきが原御陣之時も藤左衛門に別宮川口並に撫養へ之道筋御番被仰付浦人數多召連罷出御番相
 勤申御事

一太坂御陣之時小船數多被仰付方之被召遣候其節從 蓬庵様御一ツ書頂戴仕御意之旨奉守御陣中
 へも罷登り 御目見仕御歸陣被遊則浦中諸役三年御赦免被成難有奉存御事

一廣島御陣之時も安藝迄網船數多被召遣候其刻藤左衛門於別宮川口御番梶原藤左衛門殿と一所に
 被仰付御事

一西國島原亂之時も三枚帆三拾艘計方に御早船安宅を被召遣候御事
 右之通御奉公仕候屋敷は於度々七畝拾五步宛被下來候此度五十一人被下屋敷も先年之七畝十五步
 宛被下度奉存候

一別宮浦網代近年遠淺に罷成大網網代無御坐事

一網干場並在所之岸田島川成申右之通てせはに罷成加子とも古來三十三人に而御坐候次第に數多
 く罷成唯今は百五十人己上にも御坐候處作物高百石斗に而御坐候へはすまあい無御坐候而から
 け申候間可然様に被仰付可被下候申上る所如件
 寛永十九年六月十八日

藤左衛門
 加須屋與次太夫殿
 井村喜三左衛門殿

御婚禮諸役割仰付覺書

(德島市吉田半三郎氏所藏)

慶安貳年

因幡守様御婚禮諸役人被仰付覺

一むかひの使者 のしめ長袴

一與請取人

一貝桶請取人

蜂須賀一學
 賀島主水
 長江縫殿助
 西尾左京

一守刀請取人

一守脇刀請取人

一興請取以後臺所迄供之役並興寄役人

一諸事指圖人

一門を臺所口迄けいこ歩行十人

市原六左衛門

森五兵衛

赤川七郎兵衛

平瀬角右衛門

山川與三左衛門

小谷幾左衛門

齊賀紋左衛門

中山與一助

木村又之進

貝沼元兵衛

土橋清三郎

假屋十郎右衛門

井後作一右衛門

加志安兵衛

西岡善左衛門

長谷部傳右衛門

加藤長兵衛

九郎左衛門

伊左衛門

中川彦左衛門

近藤彌次左衛門

中内孫右衛門

長谷川奎兵衛

稻田勘解由

大津彌兵衛

折下角左衛門

三浦次郎右衛門

一しそくさしのしめ長はかま

一打合の餅 夫婦四人

一庭のたいまつ奉行 二人 歩行者

一祝言の夜奥方臺所に而万見台人のしめ長袴

一表門に而道具さいはん並興添員桶役人挨拶亦供之士罷歸刻一禮其外諸事見合肝煎人のしめ長袴

一表門番 のしめ長袴

二四

井村徳左衛門
正田奎左衛門
渡瀬喜左衛門
片山權左衛門
落合與次右衛門
福岡孫左衛門

外鐵炮者三十人

一裏門番 のしめ長袴

鴛 與三兵衛

下山清左衛門

沼田權右衛門

江口彌五右衛門

外鐵炮者二十人

一書院の次雁之間供之家老ふるまいしやうはん のしめ長袴

蜂須賀一學

外挨拶人のしめ長袴

鴛 内膳

稻田勘解由

大津彌兵衛

折下角左衛門

三浦次郎右衛門

穂積次左衛門

山口喜左衛門

一廣間之内に而屏風かこひ供の歩行若堂臺處人しやうばん

郡 小兵衛

一三浦次郎左衛門座布にて供乗物さいりやう人並中間六人此しやうばん人は岩田監物方可申付

候

一見まい衆振廻挨拶人のしめ長袴

賀、島主水

蜂須賀一學

西尾左京

二五

一表にて因幡しやうはん人

西尾左京

一祝言之夜諸道具請所納並與奇亦者供之つりとし兼而來候道具肝煎人のしめ長袴

岩田伊左衛門

尾關源左衛門

大森清兵衛

馬宮佐右衛門

一奥臺處口に而供之女乗物請取さいはん人

御祝言日限四月廿一日之晚七ツ時分御祝の御膳出る次第

一御夫婦様御坐席定り候而手懸出る

一引渡出候而

一うちみ出候て

一わたり出候て

右三々九度之御盃過候而

因幡守様御表へ御出被成候右之三ツ土器は兼而御坐布かさり有之候得共御盃相濟候而は盃臺御勝手へ入るし瓶子てうし提子は右之ことくかさり置候

一御吸物ひれの物御侍上らう其外局等御盃有三方小角に土器一ツすへ銚子御勝手へ出申候
一御盃過候而追而御色直し
一御拾二ツ

内一ツはあつ板のもの同一ツは御こし巻

一御けしやう帯一筋

右三色臺に積出る是に色御直し候而追付御坐敷へ御出被成候時因幡守様にも奥へ御入被成候

一御雜煮

御盃三方小角に土器一つのせ御夫婦様へ面々出申候

一御吸物

御盃右同然右之御祝何れも鈴酒

一七五三

一御吸物 右御盃ぬり物

御奥様へ出る此時かあたしめ酒かんなへに入但御盃臺有御菓子御茶

一右御祝過候而 因幡守様御表へ御出被成候

- 一 あたゝか食御侍上らう御相伴御盃御所様へ出申候但し御盃臺に据て
- 一 因幡守様は御表に而上り申候御相伴西尾在京

御軍法御備定

(名四郡 仁木幸太郎氏所藏)

- 一 御出陣觸□□御城江戸如御觸之白木之御書院に而御頭人被仰渡事
- 一 御出陣前に於慈明院八幡春日龍王堂三日護摩御執行之事
- 一 御出陣五六日前士卒共慈明院に而誓紙仕上候事
- 一 御出陣二三日前に何れも諸士被召出御目見御盃被下候事年頭御規式之ことし
- 一 御出陣一兩日前御氏神八幡宮春日宮に御參詣行列有
- 一 御出陣之砌御供被仰付次第は新參衆は親子之内一人御殘夫も一代過二代目かは親子共御供是義備人質他之備え御加へ之事但古參は親子一所之事可時寄事

御備定

- 一 中一ノ御先備ノ御家老 同心有之は直に是に付外に組頭兩人與共物頭五組之内一人其備之御目付也
- 一 左の御先備は二の御家老 此下右同斷

一 右の御先備は三の御家老 此下右同斷

御旗本前備は

左御一門 牢人衆預り此小頭組外衆物頭三人宛御使番一人御目付
右御家老子息 右同斷

御旗本

一 一番鐵炮頭 御下仕置其外も有

□御勤役衆之持也

二 番弓頭 御役弓此頭

其節極々

三 番長柄 御横目其外も

四 番持鐵炮其頭

五 番持弓

とさつき

六 番旗

二十本

此頭付 此頭に□□吹貫二本

金□□□□□□□□

右

御馬先両方□□□□

黒地黒ていの

御旗二本

御旗二本

大御馬印

金錫杖壹本

此頭預り下仕置

小御馬印

金銀三つだんご一本

此頭不足

奥小姓

赤き羽織

醫師

御側役人

兒小姓

赤き羽織

茶道

黒羽織

御使番赤母衣

祐筆黄羽織

貝

太鼓

金

御歩は切刻頭横目左右

御乗馬

御乗物

御具足箱

御威定箱

何れ茂御側に持

御役備は

四御家老

是も一組

物頭三人

何れ茂御備之内寄合組衆相備也

小荷駄奉行

中老之物頭兩人

小荷駄大方千二百疋

左右並御臺所衆 但春夏秋冬に違有

陣場奉行は

普請奉行の事備諸手

一二日早く立

普請奉行作事奉行大工頭並大工人足共大勢召□□□□□□屋懸也

小屋場□□□□□□衆也

御留主居は一□□□門二御家老三組頭貳組圍版に而組子共

右之外御代官町奉行郡奉行金奉行藏奉行不及書

高役人數遠近に而違五拾里の内

一万石に五百人馬上貳拾貳騎

五千石に五十人馬上十一騎

二千五百石に百三十人馬上六騎

千五百石に七十人馬上四騎

千三百石に六十人馬上三騎

千石に五十人馬上貳騎

八百石に三十五人

六百石に三十人

五百石に二十五人

四百石に二十人

三百五十石に十八人

三百石に十七人

二百五十石に十四人

二百石に十人 是迄騎馬是下歩立

百五十石に八人

百石に六人

百里に□□□□□□五十人

馬上十六騎此下此積に割也

人數積

知行同しといへとも役高にか

人數多し是は役人も今如此

高千石に旗一本下甲騎馬一騎宛千石の内にも物頭は旗一本染様此己前之ことし

鐵炮頭弓頭長柄頭何れも折掛染様此己前之ことし

番指物此以前之ことし色こん絹の長さ九尺但九布を重而切さきの長さ指物竿袋より一尺五寸

但かさなる竿の元を三寸程ぬいて

一添指物に有間敷事

一並立物には思ひくの事

一立物甲羽織面々着仕候を書付上げ可申候付面々旗付紋同前之事

御法度三ヶ條

一組付之諸士大身小身を不分忠功手柄之事

ひひさなく與頭上中下の以書付可申上事

一與子之士組頭之不聞下知働候は可爲打捨事

一物頭□□□□不申兎角大勢の組子を□□□□□□

右之外

一陣場に而親類相果候共御合戦之内は忌無之候事

一手負は親類下人立寄小屋へつれ可歸候早々醫師御本陣へ可被申越候事

一鐵炮一組に郷鐵炮三拾人宛添外に玉藥持有

一鐵炮弓長柄は何れも朱塗笠もりの黒羽織後まんじ其外家中の雜人も可爲右之羽織事其内御持鐵炮持弓は何れも具足並足輕も小頭は着籠可着事

御法度書三拾ヶ條有此外

光隆公御定也

寛文四年

辰正

關所に付仰渡書寫

關所之事

(名東郡富永久基氏所藏)

一御國中百姓依不届關所被仰付候節事

不届者家財は不及申所持之名田買田御藏給知共關所申付候御奉行方へ取上入札を以て相拂御藏知は御代官給知は給人方々其筋之證文可差上候

一諸士譜代之家來 上へ對不届有之關所被仰付節之事

家財は不及申田地所持仕候は名田買田御藏給知共關所申付候御奉行方へ取上入札を以相拂御代官給人方々其筋之證文可差遣候

一諸士譜代之家來對主人就不届主人關所申付節之事

家財は不及申に田地所持仕候は御藏給知名田共主人候取上勝手次第に相拂御藏知は御代官給知は給人方へ相斷可申候お然には御代官給人方々田地買入方へ其筋之證文可差遣候

一關所人年切に賣買田地之事

賣置候田地年明候節は關所申付候御奉行亦は主人方々本人同斷に了簡可仕候並關所人年切買地之義年明之節は任證文之旨に本地至る勝手次第に請返候様可仕候

一關所人書諸道具之事

本人同斷に可被召上候其外不届人家内構置候類親又は家來等之諸道具之義も一統之義に候併願等申證儀之上其筋於相分には夫々可被返下候

一末々御扶持人又は町人等之事

關所於被仰付には右可爲同然候

一百姓等子孫無之者之事

死絶人走人等之跡之義は勿論名田買田共御藏知は御代官給知給人夫々取上裁判可仕候

右之通向後被仰付候條得其意可有裁判者也

正德五年六月七日

山田 織部
賀島 主水

町御奉行

郡御奉行 中

御代官

御目見仰付覺書

覺

(阿波郡 瀧本眞海氏所藏)

阿波郡伊澤村明王院義先規之趣彼是申立御目見被仰付被下候様願出候段承届之願之通此後御目見被仰付候條此段可申渡候以上

四月廿三日

右之通御當職御書付を以被仰渡候に付則召出申渡候上猶如此證文相渡置候也

明和四亥年四月廿七日

長谷川 三平

阿波郡伊澤村

明王院

船法申渡覺

(郡木買部 吾氏所藏)

一 一番貝に而食事可仕事

二 一番貝に而船拵可仕事

三 一番貝に而庭取太鼓に而浮出可申事

一 御船湊浮出し候は、口に而猶豫可申事

惣御船浮揃候刻右方之跡船方印を以招可申候夜分は明松立可申候其節御座御船より貝吹せ可申候間右方左方一番船に付可致出船事

一 若し湊隔御船繫申刻御出船之節次第相圖と相心得可申候貝之聲聞候所は右之通貝之相圖と

可相心得事

- 一行列者右方左方之一番船に付次第に其列可相守事
- 一霧霞之節は御召船之太鼓貝に付乗可申事
- 一海上に而二ツ之貝騒しく吹せ候は、惣御船承次第に御座御船に寄せ御船之趣見届可申事
- 一晝夜共何之湊與心當乗申節俄に心當之湊より手前或は近所に而貝吹せ可申候其節は右之湊に御船入與相心得可申候並汐待同斷
- 一湊出入之刻櫓指止め拍子木に而可爲相圖事
- 一加子共働善惡とも早々可申出候不及申に候得共はた羅さの善惡聊依怙仕間敷事
- 一御船當合乗損之儀早速可申出事
- 他國者乗せ御船之内見せ申間敷事
- 一公儀御役船出入之節者隨分除け可申事
- 一湊に而御船乗組之者共何れによらず猥に陸之上り申間敷候尤無據儀候節は御船方之案内可罷越事
- 一湊出入之刻御船頭之下知無之口々に了簡仕間敷候並大風大波之節右同斷

- 一所々湊に而御船繋り之節隨分正敷繋置御役人加子どもに至迄行儀正しく可仕事
- 一走り船之節楫乞楫取帆前水繩尻夫々之役人無油斷様に所々に差置可申候並湊出入之刻も夫々之役人右同斷之事

- 一押走り湊出入御船繋候節風波並水出或は諸船多出入仕刻御船頭無油斷裁判可仕事
- 一火用心大事に可仕事

一湊出入之刻隨分靜に可仕事

- 一御座御船近所諸大名御召被成御船往來之節は無禮無之様可申付候尤乗組何によらず右様之節は右同斷之事
- 一公儀御番所前に而無禮無之様可仕候尤乗組何れによらず右同斷之事
- 一大小之御船湊出入之節前後之無争乾滿にまかせ大小船前後可爲事
- 一闇夜或は雨降懸候節又は瀬戸狹湊に而船の近く乗申間敷事
- 一大風大波に繋仕候節御召船之風上汐上隨分除懸可申事
- 一瀬戸山相狹湊に而前後之争仕間敷事
- 一湊出入之刻其時々汐之干滿或は風又は御船之大小水出等相者御船頭了簡を以乘可申事

但先船すわり候を見候は、随分我船先船の乗懸不申様可仕事
 一 櫓精出し押不申加子有之候得者早速可申出乾與御咎可被仰付候
 一 船中に而病氣等に而櫓押不申加子之儀は御褒美不被下置候
 一 海上に而御座廻御供船共子細有之近所に外船居不申類船に申渡儀候は、御印御船之表へ立可申候間其船子細有之に相心得手寄之御船見付次第寄せ可申候夜分は明松立出し可申事
 一 海上または湊に而急御用有之節は小船に常之御印に而無之印或幣立出候は、御用船は相心得御船頭楫取其外役人に而も通口矢倉杯に罷出御船頭何某乗候御船と名乗可申事夜分は御提灯二ツ立出し可申事
 一 向後御船岩瀬に摺せ又は碇等に當り其外船底之疹にも成可申哉に存子細有之候は、何方に而も着否可申出候若し御船登せ候上に而右之疵疹相顯候は、御船奉行御船頭不調法一入重く可申付候間此段右之通相心得可申候事
 一 近來加子共猥に相成安宅御雇御船頭楫取並御船方之面々申付とも不相守且櫓押之節くわへさせる等いたし候者有之第一火用心にも相懸り不行儀之事に候向後右様之儀於有之は乾與御咎め被仰付候

右ヶ條於相背者其品に應咎め之輕重可申付者也

文政七申年四月吉良日

御船方

鈴江嘉右衛門

(徳島市 佐々木三郎氏所藏)

御目見指延願上覺

乍恐奉願上覺

私親綿屋小三郎儀

先達而病死仕跡式私へ被仰付難有仕合奉存候隨而來年頭繼目
 御目見御結構私へ被仰付難有奉存候然處未だ幼少に御座候に付成長迄御指延被仰付候様奉願上候
 乍恐右奉願上通被爲聞召届被下候得は難有仕合奉存候以上

安政五年十一月

綿屋

源三郎印

内藤安藏殿

天野彦二郎殿

兒島太郎左衛門殿

四二
（名四郡平田彌平氏所藏
御用觸寫控帳中抄出）

御忌服月額剃に付御觸寫

齊昌公逝去國喪毛剃制限

太守様先月廿八日の御定式之御忌服被為請候條此段可奉承知候隨而御中陰に附御下一統月額之義は左之通相心得候様夫々各々通達之儀可有了簡候以上

十月九日

一御年寄御用人御用人席之御留主居御次廻右は御中陰明月額可申事
一外様中老の日帳格迄但し嫡子共

右は御服被為請候御日取か三十五日相立候得は月額剃可申事

但し髭剃之儀も同斷

一御鷹匠御徒士御臺所人小步行格

右は同斷二十日相立候は月額剃可申事

但し右等之類髭剃申共不苦事

一無格之内に而御目見手代之類並其餘御目見被仰付類右に順し候事

一無格之者共右同斷十日相立候は月額剃可申事

但し髭剃之義は不苦事

一陪臣又者 右は月額不苦候事

一西御丸引除御用相動候面々には御中陰明月額剃可申事

一右同し無格類之者共は三十五日立候は月額剃可申事

但し髭剃之義は前條之通

一藝術之義は追而可相達旨申達置候處來月四日か相始め可申候此段御家中被遂通達支配之者共へも相達候様可有了簡旨御目附中申達候事

安政六年十月九日御觸寫之通

（名東郡
富永久基氏所藏）

上意寫

上意

近來不容易時勢に付今度政事向格別に令變革候間何も爲國家厚相心得心付候儀は可申聞尙年寄
ごも可申談候

一中務大輔殿御渡御書付今日 上意之趣誠に以厚御思召國家之御慶事無此上難有事に候昇平殆三

百年其流弊綱紀も相弛み武備御行届に相成兼々折柄近來外國之事務頗に御指湊に相成右御取扱振分自然天下之物情指響終奉惱

叙慮至り深く恐入思召候素 公武之御間柄聊も御隔意被爲在候御事は無之候得共何となく御情實御通徹に相成兼候故之義に付追々 御上洛万端 御直に被仰出度事 思召に而則御内々被仰出に相成候併 御上洛之義は寛永以來 御廢曲に相成御式に候得は萬端取調急速には御行届に難相成付暫之處年寄共御猶豫相願候處此度の義は御舊例に不爲抱格外御省略御行粧等万端御易簡に被遊思召に付急々取調次第に被仰出甚御急思召候事に而万事御誠實の思召御直に被仰上御合體御懇算之上從來之弊風御一洗御武備被遊御振張

皇國と世界第一等之強國と被遊候 御偉業を被爲立上は 天朝之震懣を奉安下は万民安堵爲致度事 思召候に候得は何れも厚奉得其意御政事向御變革之筋等見込之義可有之候得は聊も不憚忌諱國家之御爲第一に相心得心底を盡く可被申述候猶追々被仰出候儀も可有之候間飽迄も其意を體し可抽忠誠也

近年之内

御上洛可被遊と被 思召候御治定之義は追而可被 仰出候此段先づ御内意可申達旨被仰出候

右於芙蓉之間一役一人へ御達

戊六月朔日

文久二年

稻田家來學習院へ差出控

(板野郡 多田幸太郎氏所藏)

今般浪士共足利之木像を梟首仕候に付會藩に召捕候由草莽無位之族私に加賞罰候非科難遁筋に有之候然し彼輩心情幕府御因循之様存込

皇命御徹底難被爲遊嘆慨一時危激之行を以幕府之御感奮を奏望仕候義に而全直諫面争之心極其跡奉輕蔑

天朝候に相涉候得共心情においては精忠正義尊攘而已志候者と奉存候元來足利之逆罪は青史所載醜不可掩事に而方今名分正明に被爲至御義に候得は逆臣之計疑正士之鼓舞にも相成於今日補助不尠何様膺懲之期至一時之失錯に依積年之素志を相誤縲維之中に而切齒扼腕可仕義可憐之至に御座候何卒非常之御破典を以彼輩既絶之命を賜候事に相至候得は當人は勿論於其れも感激奮興有事之日決闘死戰可仕義は奉申上迄も無御座何分

皇國安危此時に相決候機會苟も報國之志望之者は屹度御救濟被爲遊候御義は何様之罪罰相蒙候共

決而遺憾有之間敷と奉存候此段謹而奉言上候誠恐誠惶

亥三月

稻田九郎兵衛家來

三田昂馬

小林道介

林徹之丞

王政復古に付被仰謁御書付寫

(名東郡久基氏所藏)

慶應三卯年十二月廿日於

御城鶴御間被御聞御書付之寫

此度京師變動に付過日一同之存志相尋追々申出も可有之候得共尙又熟考いたし候處今般朝廷之御處置唯々兵威を以御壓倒被遊候御姿故天下人心信服之場には相至申間敷最前被仰出候王政御復古確乎之御基本被爲建候御趣意に相及朝憲も難相立被存候既此間中爲見置候書取之表に而相心得居申懸り之事故何時諸藩之兵を闕下へ被爲召候儀も難計

朝命とは乍申名義條理難相立時は容易に出勢之儀如何可有之哉素方

王室へ忠勤之儀におゐては確然之事に候得共實に

皇國之御安危且は當家進退之決する機會に候間家中一同會議之上其宜に隨ひ一定之基本相立度存志に付明廿一日於目通一同議論申付候條篤と熟慮之上其節赤心無殘處可申出候

御目見願上覺寫

(總島市馬詰堀五郎氏所藏)

乍恐奉願覺

私伴兼太郎儀今年拾四歳に罷成候御目見被仰付被下候様奉願候奉願通被仰付被下候は、難有仕合奉存候右之趣御序之刻可然様被仰上可被下候奉憑存候以上

慶應元年

丑三月八日

馬詰三藏

(書判)

長谷川近江殿

上下乗船人數等申付覺

(候將録須賀家所藏兩國法式之冊中抄録)

覺

一高七百石上下拾貳人

小六端帆

一同八百石同拾參人

中六端帆

一同千石同拾七人

大六端帆

一同千三百石上下拾八人

七端帆

千五百石同拾九人

一同貳千石 廿貳人

八端帆

貳千五百石廿三人

壹艘舟に而上下之刻は大圖右之通人數相應に而御座候御上下之節又は常体に而も大船には右之人數を見取五六人宛も多乘申候已上

七月九日

覺

一高 七百石上下拾貳人

大六端帆

八百石同拾參人

一同千石同拾七人

七端帆

一同 千三百石同拾八人

八端帆

千五百石同拾九人

一同 貳千石 同 廿貳人

九端帆

貳千五百石同廿三人

在江戸仕面々上下之節右之通御船可被仰付候哉八端以上には傳間船壹艘宛相添但御船數之節は二

三艘相に傳間船申付候

一物頭之面々へ者取次を加壹艘舟相渡取次不參節は乗合申付候

乘人並櫓立之覺

定櫓六丁立

一三枚帆 水主四人乗人上下貳人下には三四人

定櫓八丁立

一大三枚帆 水主五人上下三人下には五六人

同拾六丁立

- 一四枚帆 同拾人同四人方七人迄下には拾人迄
- 同二十丁立
- 一五枚帆 同拾四人乗人上下八人方拾壹人迄下には拾四五人迄
- 同廿六丁立
- 一六枚端帆 同廿壹人同上下拾貳人迄下には拾五六人迄
- 同參拾四丁立
- 一中六端帆 同廿九人同上下拾參四人迄下には拾七八人迄
- 同三十八丁立
- 一大六端帆 同三拾三人同上下拾五六七人迄下には廿壹貳人迄
- 同四十二丁立
- 一七端帆 同三十七人同上下拾八九人方廿壹貳人四五六人迄下には三拾壹貳人迄
- 同四十六丁立
- 一八端帆 同四拾壹人同上下廿八九人方卅壹貳人迄下には四十人迄
- 同四十八丁立

- 一九端帆 同四十三人同上下卅四五人方四拾人迄下には五十人迄
- 同五十丁立

一拾端帆 同四拾五人同上下四拾壹人方四拾五六人迄下には六十人迄
 右者常体大坂上下大圖懸人數如此御船組申付候但頭多乘人者御船には端を増見計に申付候以上

覺

- 一銀拾貫目方四十貫目迄 大三枚帆
- 一同五拾貫目方八拾貫目迄 四枚帆
- 一同九拾貫目方百五拾貫目迄 五枚帆
- 一同百六拾貫目方貳百貫目迄 六枚帆
- 一同貳百拾貫目方參百貫目迄 七端帆
- 一同三百拾貫目方四百貫目迄 八端帆
- 一同四百拾貫目方五百貫目迄 九端帆

右之通當春御船頭共に尋候へは書付指上付今月十八日之御寄會にて豊前殿へ申達候へば御聞届之上向後右之恰好に申付筈但乘人有之節は時至見合御舟申付筈

延寶三年十月十八日に極る

右は去年相定御銀船之書付

覺

一 高七八百石以上之面々に而も大坂表或城下に而無之方へ御使者に被遣節は有來通應人數御船組申付候江戸へ被遣節は荷物多積不申候故帆前壹端宛之増被下候御使者船之節は荷物多無之付右之通申付候

一 西國表へ御使者被遣候節は御船に久々乗組居申付少身成者共にも帆前壹端宛之増被下候七八百石以上之面々には帆前貳端充増被遣候西國へ被遣候御船には七端に而も傳間船添答
一 城下へ被遣御使者舟は事に御舟莊赤根幕加子共にも對し着物申付候日覆之儀も何時も申付遣候

覺

一 万治四年に向後は上下三四人之御使たりと云共道具を爲持城本などへ乗舟は五枚帆可申付大坂へ參る舟は如有來可申付之由稻田四郎左衛門馬詰半兵衛爲御使被申渡候以上

七月九日

奥向取締申付覺

覺

(侯爵蜂須賀家所藏
兩國法式之冊中抄錄)

一 從奥大戸之口暮六時鎖ふるし可申候奥のかさは中居女に渡置表のかさは當番之横目手前に指置可申候萬一難去用事於有之は裏判役者へ申斷可任指圖事

一 十歳以上之男子大戸の内入制儀禁之事

一 諸商人臺所の内へ呼入義可爲停止番所に留置横目之者相加り賣買之挨拶可仕事

一 女中祈禱など頼遣候刻は何時も可爲男使事

一 書付有之所を奥へ罷通義一切禁之免許面々は可爲制外事

一 於奥料理出初は奥臺所膳立之間へ横目壹人料理人物奉行次下男當役人迄可被通事

一 女中不依上下何方を文來候とも文並何にても書付候物來候は横目者請取之糺粘付の文たりといふとも遂内見其後主方へ可相渡此方外へ遣候ふみも右可爲同斷横目にもしかくし男女共於

取渡は急度双方可行罪科事

一 年寄とも初女中方へ來る親子兄弟たりといふとも臺所へ呼入儀可爲停止萬一不叶子細有之は裏

判役之者に相斷聞届上にて可任差圖事

一惣而大き成荷物之類奥へ通路之節横目者改之出入可有之事

一諸町人其外男女出入堅停止之或音物請或訴訟ケ間敷義取次仕間敷事

一女老若上中下女至迄隠密ケ間敷儀男女ども直に詞をかはず儀堅令停止事

一自分爲用所夜に入焼火儀一切停止奥方火之用心無油斷可申付事

一横目者兩人充晝夜無懈怠可相詰事

一女中病人有之節は渡邊道治可療治事

一奥臺所へ罷通者別紙書付出置候間此外一切停止事

一不及云男女猥ケ間敷体有之候は、早速横目之者共裏判役之者迄可申聞急度遂吟味可申付事

未三月十三日

御作事申付に付定書

定

(侯爵蜂須賀家所藏)
西國法式之冊中抄録)

一今度所々屋敷作事申附の條諸奉行其外普請人大工木挽等至迄諸事無油斷精出可相勤若存疎略無

精成仕合於聞及は可爲曲事事

一 大圖家作之儀以指圖雖申渡其外諸事任前田伊兵衛置條可得其意事

一 小奉行の者共作事方之儀萬前田伊兵衛速水惣左衛門兼松惣右衛門指圖請勤可申但存寄於在之者何時茂無遠慮兩三人申聞令相談指圖次第可相勤事

一 就作事萬勝手方爲可然と存外聞惡小道成儀仕事聊可爲無用附諸事從町人手前相整砌又日僱大工入申節依怙最負仕儀於聞及者其身は不及言依品父子兄弟迄可爲曲事事

一 諸事作事方之儀伊兵衛惣右衛門惣左衛門物每申合可相勤依事數川源太兵衛儀茂々相加可令相談然則面々存寄少茂無遠慮可申談也左様之節者何時茂横目の者にも爲聞可申事

一 屋作之儀指圖有之上は不及言爲下仕替申儀堅無用也但窓戸口坏明様又屋禰坏之取合惡所在之は見計指圖引直可申尤此度之作事之儀物每輕申附上者恰合可然とて作廣申儀堅可爲無用事

一 屋敷中長屋住房之儀兼相定書附有之上者從何方雖申奉行以意得少茂仕替遣之儀停止訖尤小奉行並大工下にて指圖之外於仕者可爲曲事事

一 就作事方 公儀御法度構敷義亦は依品世上体大奉行之者共聞合申度砌者不依何時兩留守居者度々可申談事

- 一惣左衛門惣右衛門儀兼而申聞通有來用之事手透には度々作事場は罷出萬肝煎可申事
- 一作事方何れも之手先出來目之義便宜次第度々國元は從大奉行手前可申越其筋者何時も惣右衛門惣左衛門横目之者可有加判事
- 一作事奉行並役人大工至迄日中普請在之内門出入之儀不及相改普請仕廻亦は休日之砌は何時も同前定置通可相守不叶子細在之節者横目之者伊兵衛相理可罷出事
- 一諸事横目在之上者萬相嗜作事方精出可相勤事
- 右之趣可相守者也

寛文四年二月二十七日

江戸へ召寄者共心得方申付覺

覺

(候爵蜂須賀家所藏
兩國法式之冊中抄録)

- 一今度江戸へ召寄者共於伏見中一日滯留道路障無之は十二日可罷越於途中面々心々無之諸事申合作法正自他共喧嘩口論相慎み至下々迄堅可申附事
- 一宿札在之上は尤可任其旨不及言方々見物並好色高聲博奕等之儀不仕様至下々迄念入可申附事

- 一於道中面々振廻附寄合咄申儀可爲無用若不叶子細在之は横目者相斷可任指圖事
- 一寄宿出立時分申台一列に罷出晝休同所驛に可在之事
- 一於御關所彌作法正至下々迄不禮無之様堅可申付之御番所へ横目者先達罷越可相理若横目者指合儀於在之者船川渡之裁判申附者之内可勤之事
- 一船川渡之砌裁判役申附者は先へ罷越於其所肝煎人馬荷物取越可申横目之者は何時茂可有手前事
- 一歩行者次弓者持筒並鉄炮者小者至迄宿取跡拂可申附船川渡之節は尤其頭に可令裁判頭無之替之時は横目之者可支配之事
- 右條々可相守者也

諸事起請文之事

起請文前書事

(候爵蜂須賀家所藏
兩國法式之冊中抄録)

- 一千松様へ私共儀御付置被爲成候上者不申上御爲一大事奉存御奉公方常々油斷不仕御法度堅相守諸事御用方に付私曲仕間敷事
- 一好色之道付男女共に御扶持人之儀は不及申迄外人へも猥義毛頭仕間敷候付博奕間敷類堅相嗜可

申候事

一傍輩中間柄能可仕候尤互心底不殘申合御奉公可相勤候若不行義之者御座候は、内證にて異見可申候に付他所へ罷出御屋敷中之沙汰善惡によらず噺申間敷事

右條々於相背者添も 但名なし

起請文前書事

一私共に被爲仰付趣毛頭疎略不奉存一大事に相守可申候並御用方に付依怙偏頗不仕諸事御尋之儀有体に可申上事

一御爲之儀付私共存寄御座候は、縦不應御機嫌に共無遠慮乍憚可申上事

一御隱密之義承見及候共他所人へ之儀は不及申親子兄弟に而御座候とも聊申間敷事

右條々於相背者辱も 但名なし

寄合之節料理出方申付覺

覺

面々寄會節依無據子細料理出度砌者横目者に斷之一汁三菜成程輕可用の旨從前代の趣至度々雖相

(候爵 蜂須賀家所藏 阿國法式之冊中抄録)

聞其以後猥に有之由間届別而不所存之事候何茂勝手爲取續自今以後此義一切令停止候若違背之輩有之而料理出又は給候者候は、申付品も可有之條堅可相守者也

御目附衆へ上る阿波淡路兩國之事

御目附衆へ賀島主水記之上る扣

但阿州に在留之砌依願也

(候爵 蜂須賀家所藏 兩國法式之冊中抄録)

名東郡 名西郡 那賀郡

阿波國 板野郡 阿波郡 合拾郡

美馬郡 三好郡

麻植郡 勝浦郡 海部郡

名東郡 渭津城山之高並東西南北間數覺

一本丸高南之方廿壹間半

一同 北之方廿三間半

一同 間數東西七拾壹間但山上之平地

- 一南北 廿四間
 - 一櫓 貳ヶ所
 - 一二之丸高從本丸三之丸迄次第下り
 - 一同東西間數三拾四間
 - 一南北拾七間
 - 一櫓 壹ヶ所
 - 一三之丸高拾四間半
 - 一同東西間數四拾壹間
 - 一同南北拾七間
 - 一城山上之半地迄東へ上る道九拾三間
 - 一同從西上る路百廿間半
- 居城間數之覺
- 一東西百廿八間
 - 一南北百七間

- 一南之角を西之角迄折廻百三拾五間
 - 一櫓三ヶ所
 - 一門貳ヶ所内壹本門但東口内壹ヶ所東口埋門常に出入不仕
 - 一堀幅八間四尺 但ひとへ堀
 - 一鷲之門之内東西三拾八間
 - 一内南北五拾八間
 - 一太鼓櫓下之門を西丸迄道度貳百四拾貳間道幅三間を拾間之間但町にして三町半
- 西之丸間數之覺
- 一東西南之方七拾貳間
 - 一内北之方百五拾六間
- 城下橋數之覺
- 城より東
- 一惣構之門福島口
 - 一但橋長廿四間 幅三間

川幅廿八間

城方北

一惣構之門助任口

但橋長七拾六間半 幅四間四尺

川幅八十四間

城方南

一惣構之門寺島口

但橋長三拾四間 幅三間五尺

一惣構之門三ヶ所

但右之外に西之丸か出来島へ出る口一ヶ所是は橋も無之輕き門にて御座候水之手に門一ヶ所
南西寺島之方に有之

此外に橋四ヶ所

一住吉島橋 長廿貳間幅貳間

一出來島橋 長拾三間幅貳間半

- 一新町橋 長四拾七間幅四間
- 一佐古橋 長八間貳尺幅三間

川幅拾貳參間

渭津城下分川口へ道度覺

- 一津田川口へ 廿町
- 一籠川口へ 一里半
- 一別宮川口へ 一里
- 一今切川口へ 一里半
- 一廣戸川口へ 三里
- 一撫養川口へ 四里

川口合六ヶ所

一渭津從城下大坂川口へ和泉路は三拾三里淡路路は三拾八里二三月か八月迄は和泉路を乗る九月
か明る二三月迄淡路路を乗る

淡路國 津名郡 合貳郡
三原郡

一津名郡須本城山高古城殊外廣石垣にて有委細繪圖に御座候

須本城屋敷間敷之覺

一東西七拾間

一南北東之方八十九間西方六十間

一門三ヶ所内一本門北向同一東但濱へ出る口同一西口

一堀幅十間半 但ひとへ堀東は堀無之濱

右之屋敷に家老稻田九郎兵衛指置申候

一惣構之口三ヶ所堀幅十四間

西大手物部口土橋同堀筋北之方に橋一但西宇山口同南之方千草口但堀無之山際

一南北は 紀伊國 和泉國へ向

一從城屋敷川口迄七町五十間余但北之方

一須本から坂川口へ和泉路は廿一里攝津國路者廿三里二三月から八月迄はいつも路乘も九月から明も

二三月迄攝津國路乘る

一須本之城山は古脇坂中書居城則中書被立候由申候

一須本から同國津名郡由良古城之跡へ陸路貳里船路三里古松平宮内少輔居城之由申候

一須本から同國三原郡志知へ陸路四里程御座候古加藤左馬助住居之由にて屋敷構堀土手有

阿波守所持仕船之覺

一關船小早 百七艘 但十六端帆を三枚帆迄

一荷船十三艘 但十五端帆を六端帆迄

一右之外於國元用事相調候河船船高瀬船其外小船數多有之候

一三代以前之阿波守代には十六端帆を十二端帆迄關船六艘慶安元年子之霜月十四日之夜類火に逢

燒失仕候領内之材木次第不自由付而其後船數造申儀不罷成十六端帆之船貳艘造申候此二艘今度

兩人上下に乗申船に而御座候

一阿波淡路兩國本高廿五万六千九百四拾石八升三合

御判物 廿五万七千石

内 拾八万六千七百五拾三石五斗八升三合

七万百八拾六石五斗

阿波

淡路

右兩國之出目並新開共高九万二千十四石四升五合

内高兩國之都合三拾四万八千九百五拾四石二斗二升八合

一渭津城下町家數千四百七拾二軒

一人數壹万八千八百貳拾六人

一阿波十郡在々家數五万十四軒

此人數合廿四万八千三百七拾

一淡路國須本城下町家數三百四十軒

一淡路國貳郡在々家數壹万五千貳百

此人數合六万八千九百廿壹人

藏入

一高拾万九千八百十四石余

一高廿万七千八百三石余

一高三万三千三百三十七石余

一高二千八百六十七石

一高五百四十石

男 女

男 女

男 女

給知並寺社領

年々荒川成

阿淡在々諸奉公人

同在々罷在鉄炮者

一高三百七十八石

一高三千八百石

一兩國扶持切米合五万五千八百拾貳石

内貳万三千七百六十八石壹斗

壹万九千九百貳拾四石壹斗

百九十九石七斗

壹万千貳百十三石

七拾七石壹斗

一知行取五十石以上侍四百九十九人

外に平島又八郎殿百石

都合五百人

一五百五十九人

扶持貳千三百八十三石貳斗

支配二千四百二十六石五斗

阿波淡路庄屋

兩國寺社領

ふちか九

支配

庄屋

合力米

猿樂米

中間小者

一百六十四人

諸下代

扶持九百六拾壹石貳斗

支配千拾九石

一五十五人

掃除坊主

扶持貳百九十七石

支配三百七石

一貳百貳人

諸番人

扶持八百石

支配六百五十八石七斗

一無足人數合百拾壹人

江戸阿波合

一三十三人

醫者茶道

扶持三百七十八石

支配四百七十七石二斗

一二百七十二人

中小姓小奉行

扶持二千七百六十六石六斗

支配貳千九百廿六石九斗

一貳百四人

步行者鷹師臺所方者

扶持千三百九十五石

支配千七百八十四石

一千百八拾貳人

弓者鉄炮者長柄者旗之者

扶持六千四百壹石七斗

支配六千百三十石五斗

一三百五十五人

船頭水主

扶持貳千六石貳斗

支配千五百七十七石六斗

一千貳百十三石

方々合力

一壹万石 但米

飛彈守へ

一七拾七石壹斗

公儀猿樂

阿波淡路本高廿五万七千石但高壹万石に付米三石去る

一銀子貳百六拾貫九百百余

江戸へ相詰侍共並中間小者造作但壹ヶ年分

一銀子三十三貫百目余

方々合力

右二口合二百九十四貫目余

一五十九人

諸職人

扶持四百八十石六斗

支配三百五十六石七斗

此人數合三千八十五人

一三百七十六石二斗

女扶持

一六百三十四石

同支配

一百九十九石七斗

阿波淡路給分

一四千三百三十八石

江戸へ相詰る侍共並中間小者造作本扶持之外加扶持一年分

以上

江戸御屋敷之覺

(侯爵蜂須賀家所藏
阿國法式之冊中抄録)

覺

豊島郡

一上屋敷五拾五間四方坪數三千廿五坪

在 原郡三田村

南

一芝屋敷表口百廿三間但從西東の三十九間行三間ひつこむ

北

一同裏百三拾間

西

一同九拾貳間

東

一同八拾五間

一坪數壹万千百廿貳坪半

一聖町東町並者三拾八間五尺三方は難記こ有

一坪數千百四拾坪

一濱屋敷表口四拾六間同裏四拾貳間壹尺五寸

一品川之方四拾貳間

一江戸之方四拾三間

坪數千八百七拾五坪三合壹勺貳才

一門前町表口八間同裏七間半左右二十間充

坪數百五拾五坪

荏原郡白銀村

一目黒御屋敷表口百七拾壹間半同裏兩脇間數難記

坪數壹万七千七百六拾坪 ヌイニ六十畝共

内壹万坪は拜領分

七千七百六十 買地也 代金貳百三拾貳兩外銀四拾七兩九分六厘

一惣廻堀幅 五尺

一表門道幅 四間

一裏門道筋 四間

一買地尤年貢出候

毎年金小判六兩壹步銀十三匁宛但壹反に付金壹步充出る

右目黒之屋敷寛文四辰十二月十五日拜領之

但光隆公之代其節在國也於御城御老中御三人御列座飛彈守殿へ被仰渡其趣國元へ被仰遣爲御禮
柘植入右衛門を以海部駿斗鮑壹箱献上之但己ノ正月五日

一屋敷請取人笹部五右衛門阿州の參着

一巳二月十二日御屋敷御奉行喜多見五郎左衛門殿城半左衛門殿本郷庄三郎殿被出其節自此方は飛
彈守殿坪内惣太永井彌右何も御同道御出合家來は稻田三郎兵衛成瀬源太左衛門小野又兵衛兼松
惣右衛門渡邊奎兵衛井村與左衛門牛田又右衛門笹部五右衛門檢地人龜田三郎太夫此等之者其所
へ出る右御奉行衆の件之坪數請取之

一右之通相濟以後追付直に芝於屋敷料理出る但上は三迄下は一汁三菜

一同日右之爲御禮御老中御三人へ飛彈守殿御越也

一右御奉行衆へ小袖三充並壹荷二種遣之但從國元禮狀に相添但小袖は不被請

附銀三枚宛下代三人大工四人の

同壹枚宛等うち三人へ

是も御奉行衆へ勤之節也

一右屋敷へ玉河之水從細越中守殿所望但二寸四方之水口其後又相添横五寸豎四寸也越中守殿家來郡安左衛門並取次中村小右衛門原野與左衛門此方は渡邊全兵衛前大森清兵衛出合改請取但重而之時は元田八右衛門其場へ出る 是も先代也

送夫御元建之事

一高取 拾參人宛

但郡御奉行御藏奉行御代官は格別高取は薪無之

一不足御小性八人

一中小性小奉行格迄

馬壹正口附

送夫 貳人

但右格式に而も定御奉行は送夫六人宛飢人改御奉行は六人

一御藏手代郡手代

馬壹正口付

送夫 貳人

一御目見御船頭右向斷

一御船頭

馬壹正口付

送夫 壹人

一御羽織屋又は御目見之諸職人杖突類

馬壹正口付

送夫 貳人

一諸手代御番人

御弓持筒之類

送夫 壹人

一御鐵炮以下貳人相に

送夫 壹人

一操師 源之丞

三拾六人

一同 之之亟

三拾人

一諸職人は道具箱持として貳人相に被下筈
以上

藩士家録歩一之目

一 半懸	四拾石以上	拾步
一 懸	四拾石より二十石迄	拾五步
六 五懸	二十石より十一石迄	二十三步
五 懸	十一石より九石迄	三十步
八三々懸	三都御留守居	十二步
以上		一

(總島市岩野新平氏所藏)
手控中抄出

江戸表火災に付材木取調申達書

急飛脚を以申達候然者江戸表

(海部郡岡田重太郎氏所藏)

上御屋敷並八丁堀下御屋敷共御類焼に付而者諸材木御用之程難計に付於山分仕成之材木所持之者有之候得者何によらず賣拂之義先御指留置被仰付右持合候材木夫々相調させ木品員數相記帳面相仕立奉指上候様被仰付に付一昨廿日飛脚を以其段相配候事に候然所右御用材木迄に而は無之杉檜梅其一切木品代付仕差上候様今日尙亦被仰付に付打返し急飛脚相仕立申候を可被得其意村々仕成有合之材木板木品共夫々相調員數代付仕帳面御役所當に相認片時も相都晝夜共精々此方へ御指出可被成候誠大切之御場合故右直打等重々手を詰相仕出候様被仰付候間無手援片時も帳面御指出可被成候此狀披見否飛脚へ可被相渡候

二月廿二日夜

岡崎 藤 左衛門

右之通尙又今日飛脚着仕候間被得其意材木板共直打爲致下拙當に帳面御認晝夜共御指出し可被成候尤直打之義は下直成方を以相居可奉指上候間是亦御心得可被下候右之段急々申達候以上

二月廿三日未刻

藤井 次郎 右衛門

和無田 西字 御役人中
折字 小川

尙々廿四日晝時迄に少も無間違御指出可被成候以上

地震に付手配申付覺書

覺

一金 三步

右之者儀此度之地震に付御長屋相潰候者此御場合御手當向難被仰付候得共別儀を以爲御手當件之通差遣候條此段申付方之儀被遂了備可有手配候也

十月廿一日

稻田家臣上京御沙汰書寫

正月十一日

七八
(七條野綾郡三氏所藏)

原士

七條茂左門

阿波宰相内

渡瀬浪江

合田左源次

寺西金右衛門

森甚作

(徳島市
多田仙太郎氏所藏)

去二十二日返答書之趣彼是御懸念之筋も有之候に付
思召之趣必徹底候様可取計候尙又九郎兵衛家來三田島馬内藤彌兵衛林鐵之丞右之輩早々上京可有
之

御沙汰候事

十二月

此度從

朝廷御別紙両通之通御達有之候に付可相達旨被 仰出候事

稻田九郎兵衛

累年不一方勤王之旨趣被 聞召候に付頃日本藩並其藩士等々

御沙汰之趣も有之次第旁以昨今之形勢神速十分之人數指出西宮表備前警衛之輩應援致緩急勉勵奉

公可有之旨被 仰出之事

正月三日

稻田九郎兵衛

御一新大御變革に付而者不容易形勢に押移り候も難圖就而者其他之所殊咽喉緊要之場所柄候間爲

王事嚴重兵備有之候様被仰出候事

但其藩中是迄爲

王室奔走之輩一々譴責有之趣も相聞候付に早々解閉候様

御沙汰候事

稻田九郎兵衛家來此節上京之者へ從

朝廷別圖之懸御達有之候旨に而申上に相成則被聞食候隨而早々人數指出爲皇國之盡力仕候様被仰

出候事

林徹之亟儀者先年犯

御國法候者に付一應

朝廷へ御伺に相成候間右様相心得候様被 仰出候事

林徹之亟儀先年犯

御國法候者に付一應

朝廷へ御伺に相成候旨昨日相達候事に候得共先三田島馬始一列上京爲仕候様尙又被 仰出

候事

奥州出張戰事之趣届書寫

(總島市 覺氏所藏)

御家様より奥島出張御人數戰事之趣御届書寫

弊藩人數之内先月二十二日一小隊三春出立川股宿へ急速出兵同郡行軍仕候所難所殊に霖雨に而相
運取不申日暮に相及候に付無據途中に而一泊二十三日夕刻川股宿へ追々繰込候所小島村へ賊兵襲
來民家燒拂且金穀等奪取之趣注進有之候内砲聲も相聞候に付不取敢參着之分繰出し追拂少々人數
指殘相固置引揚申候以後彼是探索仕候所掛田に巢穴相構へ近村所々に屯集郷民爲懼候上當宿遺恨
有之に付近日襲來之企有之候旨に而近村之者共晝夜苦心仕候趣役人共申出候に付同夜戌刻頃兩
道へ手分け仕一手は小神村へ秋山村通應援中村藩兵獵師之者嚮導申付押行候所上小國村へ同夜棚
倉之殘黨六十人計罷越宿陣之趣相聞候に付追拂置進軍一手は小島村御代田村通應援下手渡藩共進
軍仕所々番兵追拂山之手陣屋並砲台等に而暫時戰爭賊兵敗走に付追擊仕卯中刻頃宿口に而河道之
進擊合併に相成候處賊兵右之山上を顛りに砲發仕候に付砲戰に相及兵隊分配仕右兩山へ攀登り劇
戰に及候所賊兵敗走に付兵隊引纏宿内に而暫時休息仕居候内右兩山へ少々押拂已刻過惣兵引纏川
股宿へ引揚申候分捕死傷等左に通に有之候賊惣勢六百五十人計之内三人生捕四十余人打取其除射

中致候者多分有之候様相見候へ共山林之事故詳に相分り不申候旨出先隊長上田甚五左衛門方申越候間不取敢此段御届申上候以上

九月七日

御名内

小室利喜藏

覺

三流

一大旗

地赤潜撃隊と三字有之

一地白同斷

一白赤染分け

一小旗

八流

地白中黒

地白黒ノ丸

別封

一仙台藩書狀壹通

一乘馬

一正

其余小銃彈藥槍大小品々略之

一討死

關口丹藏

田浦久兵衛

一薄手

的崎貞兵衛

田近七兵衛

小川惣右衛門

一討死

松澤村獵師

小平治

秋山村獵師

長三郎

以上

慶應四辰年九月八日朝御本營に而御番中寫取

稻田家主從所置始末

(徳島市長尾覺氏所藏)

先般從

朝廷厚

思召之以稻田九郎兵衛元家來共之儀に付岩鼻福島兩權縣知事御指向に而説諭相加申候所彼者共方

不當之儀申出候段兩國蓋藩之士情に於て一切不致承服其末及沸騰

知事様御苦慮之上重々御鎮靜御加被爲遊置急御召に被爲應御出京に爲在候所兼て兵隊爲惣代東京へ歎願に罷出候者共脱歸いたし愈々再騒擾に立至り政府を重々令安撫百端説得致候へ其中々聞入に難相成彼是切迫に相及候所尾關星合兩權大參事前條脱歸に付急速歸藩協力鎮定稍暴舉には不相至候然に既に洲本におゐて遂に政府の命に背き九郎兵衛屋敷へ兵隊押寄彼之家來共を致斬戮候段第一

朝廷の御趣意に背き且知事様御平素

朝命に恭順の御道に相悖り誠心奉恐入候次第に付依元兩國蓋藩申合各右心得を以厚謹慎仕罷在官事又は不得止件々之外に道路往來不仕様致し知事様々の御命を奉待可申事

稲田九郎兵衛主從御所分の儀去る十七日於東京參事並九郎兵衛被召出別紙の通御沙汰相成候條一同可奉畏候就而は兼而藩士一同へ示方の儀をも分而被仰出候懸り右者朝命一途に遵奉可仕は申迄も無之儀一同聊心得違無之様厚申付候事

庚午十月

知事
德島藩

其藩士族稲田九郎兵衛並同人元家來北海道移住被仰付候條此旨相達候事

但移住相濟候迄兵庫縣貫屬被仰付候事

庚午十月

太政官
德島藩

稲田九郎兵衛從前知行處高一万四千五百石淡路國に纏め兵庫縣管轄被仰付候事

但別紙同人へ御沙汰之寫爲心得相達候事

庚午十月

太政官
寫

從前家祿十分一廩米を以て下賜北海道移住被仰付候事

但移住相濟候迄可爲兵庫縣貫屬事

稲田九郎兵衛

稲田九郎兵衛

元家來

北海道移住被仰付候事

但移住相濟候迄可爲兵庫縣貫屬事

日高國 靜内郡

志古丹島

右開拓被仰付候事

稻田九郎兵衛

稻田九郎兵衛

從前知行所高一万四千五百石之内家祿十分一引去其餘を以十年間開拓費被充候條受取方之儀は兵庫縣可承合事

庚午十月

太政官

德島藩

今般稻田九郎兵衛御所分被仰出候條當夏騷擾之次第に有之此後藩士一同心得違無之様篤と可申付候事

庚午十月

太政官

御關船並荷船石目積帳
一拾六端帆 御召船

(那賀郡 鈴木辨吾氏所藏)

船長五丈八尺五寸

肩 貳丈九寸

深 六尺

但腰當櫓床下方水際迄三尺壹寸貳步足 あり方上水際迄八寸入

此石目三百五拾石壹斗貳升

内

百五拾石六斗四升目

御船諸道具品々

四拾六石目

御船頭御水主乗組

拾石九斗目

飯料着替共

四拾九石目

水薪

四拾壹石五斗目

乗尻

九拾九石八升目

同荷物品々

一拾三端帆 御召替御船

船長五丈貳尺四寸

肩 壹丈七尺四寸六步

深々五尺三寸六步

但腰當櫓床下_方水際迄三尺貳步足 おおり_方上水際迄六寸入

此石目貳百拾四石八斗六升

内

六拾石目

貳拾九石貳斗五升目

拾壹石目

貳拾四石目

貳拾九石貳斗五升

六拾壹石三斗六升目

一拾貳端帆 御 船

御船諸道具品々

御船頭御水主乗組

飯料着替共

水 薪

乘 衆

同荷物品々

船丈四丈八尺

肩 壹丈五尺八寸

深五尺貳寸

但腰當櫓床下_方水際迄貳尺六寸五步足 おおり_方上水際迄六寸五步入

此石目百九拾三石三斗九升

内

五拾六石目

貳拾七石四斗五升目

八石五斗目

拾九石目

貳拾九石貳斗五升目

五拾三石壹斗九升目

一拾壹端帆 御 船

船長四丈六尺六寸

御船諸道具品々

御船頭御水主乗組

飯料着替共

水 薪

乘 衆

同荷物品々

肩 壹丈五尺三寸

深 四尺九寸五步

但腰當櫓床下 水際迄貳尺六寸足
此石目百六拾七石五斗五升
あおりの上 水際迄六寸五步入

内

五拾石目

貳拾貳石壹斗五升目

八石七斗目

貳拾貳石目

貳拾九石目

三拾五石七斗目

一拾端帆 御 船

船長四丈貳尺□寸

肩壹丈四尺八寸

御船諸道具品々

御船頭御水主乗組

飯料着替共

水 薪

乗 衆

同荷物品々

深 四尺五寸五步

但腰當櫓床下 水際迄貳尺四寸足
此石目百三拾五石貳斗三升五合
あおりの上 水際迄六寸五步入

内

四拾七石目

拾九石九斗目

七石八斗目

拾五石目

貳拾石貳斗目

貳拾六石三斗三升五合目

一 九端帆 御 船

船長四丈五寸

肩 壹丈三尺八寸

深四尺壹寸八步

御船諸道具品々

御船頭御水主乗組

飯料着替共

水 薪

乗 衆

同荷物品々

但腰當櫓床下方水際迄貳尺四寸足 あり方上水際迄六寸貳歩入

此石目九拾九石四斗八升

内

貳拾七石六斗六升目

拾八石目

七石目

九石目

拾八石目

拾九石八斗貳升目

一八端帆 御 船

船長三丈八尺五寸

肩 壹丈貳尺八寸

深三尺八寸

但腰當櫓床下方水際迄貳尺貳寸八歩足 あり方上水際迄五寸七歩入

御船諸道具品々

御船頭御水主乗組

飯料着替共

水 薪

乗 衆

同荷物品々

此石目七拾七石八斗六升

内

貳拾石七斗二升目

拾六石六斗五升目

四石六斗目

七石目

拾五石七斗五升目

拾三石壹斗四升目

一七端帆 御 船

船長三丈五尺五寸

肩 壹丈壹尺八寸

深廿三尺七寸

但腰當櫓床下方水際迄二尺壹寸二歩足 あり方上水際迄五寸七歩入

此石目六拾石壹斗八升

御船諸道具品々

御船頭御水主乗組

飯料着替共

水 薪

乗 衆

同荷物品々

内

拾九石六斗目

拾五石七斗五升目

四石目

六石

拾三石五斗目

七石三斗三升目

一六端帆 御船

船長三丈貳尺

肩 一丈七寸

深サ三尺五寸

但腰當櫓床下カあり迄外板幅貳尺貳寸

あかりカ上水際迄四寸入

此石目五拾八石二斗

内

御船諸道具品々

御船頭御水主乗組

飯料着替共

水薪

乗衆

同荷物品々

拾七石四斗六升目

拾三石五升目

五石八斗目

八石目

拾三石九斗目

一五枚帆 小早

船長二丈八尺五寸

肩 九尺七寸

深サ三尺壹寸

但腰當櫓床下カあり外板幅二尺 あかりカ上水際迄四寸入

此石目四拾壹石四斗六升

内

拾貳石四斗三升

八石五斗五升目

御船諸道具品々

御船頭御水主乗組

飯料着替共

水薪

乗衆並荷物共

御船道具品々

御船頭御水主乗組

七石目

水 薪

四石二斗目

飯料着替共

九石二斗八升目

乗衆並荷物共

一四枚帆 小 早

船長二丈六尺

肩 八尺八寸

深二尺八寸

但腰當櫓床下におおり外板幅壹尺九寸 おおりの上水際迄四寸入

此石目二拾九石七斗四升

内

八石九斗二升目

御船道具品々

四石九斗五升目

御船頭御水主乗組

五石目

水 薪

三石五斗目

飯料着替共

七石三斗七升目

乗衆並荷物共

一三枚帆 小 早

船長二丈四尺

肩 七尺

深二尺四寸

但腰當櫓床下におおり外板幅壹尺六寸 おおりの上水際迄三寸入

此石目拾八石四斗八升

内

五石五斗四升目

御船諸道具品々

拾二石九斗四升目

乗衆並荷物乗組

右者御關船石積

御水 主衆

一二拾二端帆

荷船 拾七人乗

船長拾尋二尺五寸

肩 五尋五寸

深サ七尺九寸但三寸足にして

此石目千五拾七石六斗壹升積

一貳拾壹端帆

船長七拾尋二尺

肩 五尋

深サ七尺七寸但三寸足にして

此石目千壹石積

一二拾端帆

船長拾尋壹尺

肩 四尋三尺四寸

深七尺五寸但三寸足にして

此石目九百三石八斗二升積

一拾九端帆

同船 拾六人乘

同船 拾五人乘

荷船 拾四人乘

船長拾尋五寸

肩 四尋二尺

深サ七尺二寸但三寸足にして

此石目七百九拾九石九斗二升積

一拾八端帆

船長九尋壹尺

肩 四尋壹尺

深サ七尺壹寸但三寸足にして

此石目七百石七斗七升積

一拾七端帆

船長九尋五寸

肩 三尋四尺五寸

深サ六尺八寸但三寸足にして

此石目六百三石三斗三升積

同船 拾二人乘

同船 拾壹人乘

一拾六端帆

船長八尋三尺

肩 三尋三尺

深サ六尺五寸但三寸足にして

此石目五百三石壹斗積

一拾五端帆

船長八尋壹尺

肩 三尋壹尺

深サ六尺一寸但三寸足にして

此石目四百石壹斗六升積

一拾四端帆

船長八尋五寸

肩 三尋五寸

深サ五尺八寸但三寸足にして

同船 拾人乘

同船 九人乘

同船 九人乘

此石目三百六拾四石壹斗積

一拾三端帆

船長七尋三尺

肩 二尋四尺

深サ五尺七寸但三寸足にして

此石目三百三石二斗四升積

同船 八人乘

一拾二端帆

船長七尋二尺

肩 二尋三尺五寸

深サ五尺六寸但三寸足にして

此石目二百七拾九石七斗二升積

同船 八人乘

一拾壹端帆

船長七尋一尺五寸

肩 二尋一尺

同船 七人乘

深さ五尺但三寸足にして

此石目二百石七斗五升積

一拾端帆

同船 七人乘

船長七尋壹尺

肩 二尋五寸

深さ四尺九寸但三寸足にして

此石目百八拾五石貳斗貳升積

一九端帆

同船 六人乘

船長七尋五寸

肩 貳尋

深さ四尺八寸但三寸足にして

此石目百七拾石四斗積

一八端帆

同船 五人乘

船長六尋三尺

八 肩 八尺壹寸

深さ四尺二寸但三寸足にして

此石目百拾二石二斗六升積

一七端帆

同船 五人乘

船長六尋五寸

肩 七尺九寸

深さ三尺九寸但三寸足にして

此石目九拾參石九斗七升積

一六端帆

同船 三人乘

船長四尋一尺

深さ三尺二寸但三寸足にして

此石目四拾九石九斗二升積

右者御關船並荷船共石積皆具作方之趣に少々増減可有御座と奉存候然共大要積如此御座候以上

西四月十三日

年始御祝儀申上達書

左之通藩廳へ達有之候に付相達候也

十二月廿二日

南民政掛御中
北民政掛

(徳島市
森政市氏藏所)

御在藩御留主年頭始御祝儀申上方過日相達候處爾來相改候儀に有之に付更に別帳二冊相達候條右様御心得前以相達候與相達之義は掛々官員始郷住並近郷住士族共達方御了備可有之也

但年頭始御祝儀之節登

廳之士族在役者參不參名札大属へ差出非役は披露受持之差出可申寺院並附屬以下出頭名面は其掛々より都而御差出之事

猶以近郷住士族は徳島住同様可相心得候事

明治三年

庚午十二月廿二日

元日

八字揃舊御居間々

御着座參事始官員出仕迄軍事掛學校教授出仕迄大里長並補大年寄補爲替掛頭取等列居歳頭御祝儀申上

御沙汰被下置附御熨斗頂戴

同刻鷲之御間々

御着座番士御家付御役人非役士族嫡子共列居以下同上

四日

八字揃鷲之御間々

御着座從前召出興源寺始市中寺院列居年頭御祝儀申上

御沙汰被下置附御昆布頂戴

人日

八字揃舊御居間々

御着座參事始官員出仕迄軍事掛教授出仕迄大里長並補大年寄並補爲替掛頭取副頭取等列居

御祝儀申上

御沙汰被下

同刻鷲之御間

御着座番士御家付御役人非役士族嫡子共

御祝儀申上

御沙汰被下

同日

九字揃舊御居間

御着座元日御用引に相成候參事始爲替掛副頭取迄列居年頭御祝儀申上

御沙汰被下置附御熨斗頂戴

同刻鷲之御間

御着座一番立阿波郷住士族淡路住士族嫡子共右上市郷並阿波住淡路住共勤中士族之神主列居年頭

御祝儀申上

御沙汰被下置附熨斗頂戴

十字揃柳之御間におゐて附屬同並共列居

蘇鐵之御間におゐて軍事掛管轄之卒最寄々に總代之者列居

御立掛に而年頭御祝儀被爲請候事

上元

八字揃舊御居間

御着座參事始在役御祝儀申上

御沙汰被下人日之通

同刻鷲之御間

御着座番士始非役御祝儀申上方

御沙汰被下等人日之通

同日

九字揃舊御居間

御着座元日七日共御用引に相成候參事始爲替掛副頭取迄列居年頭御祝儀申上

御沙汰被下置御熨斗頂戴

同刻鷲之御間

御着座二番立阿波郷住士族淡路住士族嫡子共並阿波郷住淡路住共勤中士族之神主列居年頭

御祝儀申上

御沙汰被下置附御熨斗頂戴

十字揃鷲之御間々

御着座從前召出阿波郷中寺院淡路寺院列居年頭御祝儀

御沙汰被下置附御昆布頂戴

同刻蘇鐵之御間におゐて從前罷出來候阿波郷中淡路共諸出家列居

御立懸に而柳之御間におゐて七日御用引に相成候附屬同並とも列居蘇鐵之御間におゐて阿淡郷住

卒郡付卒郡々總代之者列居

御立掛に而年頭御祝儀被爲

請候事

一村付卒其餘從前市郷

御目見人共之義

御在藩御留王に不拘郡々亦は最寄々々總代之者其掛々々罷出年頭御祝儀爲申上其掛參事相請都而藩廳に可申上事

上巳

端午

七夕

中元

重陽

天長節

右參事始爲替掛刷頭取迄並番士始非役士族迄御祝儀申上方

御沙汰被下人日上元之通

一淡路住士族之義年頭は從前之通一番立二番立渡海罷出可申事

但七日十五日御祝儀被爲請候事

一右同斷

天長節は兩三人渡海罷出七節は於右御地總代兩三人出張軍事掛大属へ相謁候様

阿波郷住士族儀年頭は郡々に而一番立二番立に分ち罷出可申事

但七日十五日御祝儀被爲請候事

一右同斷

天長節七節とも郡々より爲總代一人宛罷出可申事

一阿波郷住士族淡路住共年頭一番立二番立とも參不參は追伺

知事様御留主之節士族年頭

天長節七節御祝儀申上方之義は夫々兼而相達候

御在藩之通可相心得九年頭

天長節登

廳之向は官員教授以下出仕迄並大里長大年寄補とも爲替掛頭取副頭取共大屬へ參不參名札差出其餘御披露請持へ右同斷差出御祝儀申上退出之事

同上御留主之節勤中士族之神主年頭御祝儀罷出方は兼而相達候

御在藩之通可相心得尤參事へ相謁候事

同上御留主之節從前召出其餘罷出來候寺院並附屬並軍事掛管轄之卒郷住卒郡付卒年頭御祝儀申上方は其掛々に而相請都めて其掛より

藩廳へ可申出尤日限請方等其掛々に而了簡之事

年頭御祝儀申上名面指出達書

(德島市 森政市氏所藏)

大年寄中

毎年頭之義更に左之通り被仰出候條來正月八日十字揃當掛へ罷出御祝儀申上候様且出頭名面同月

四日迄に取都可被差出候也

十二月二十日

北 民 政 掛

從前市中諸職人御銀主始

御目見共之儀

御在藩御留守に不拘組丁類々に而爲惣代兩三人宛其掛々へ罷出年頭御祝儀爲申上其掛參事相請都めて藩廳へ可差出事

市郷修驗山伏巫女等今般復飾申付候内從前

御目見仕來候者共罷出度向は可爲勝手次第事年寄同補之義も組丁に而爲惣代兩三名宛當職へ罷出年頭御祝儀申上候様申付候事

右之通被仰付候條此段可被相心得候廻濟丁へ可被指戻候也

午十二月二十二日

森 直 次 郎 印

六 番 組 丁 々

年 寄 中

右御布告之御趣奉承知候

蜂須賀家御二男御渡世記 全 坂東耕夫氏
 御造初穂代献上願書 全 寺澤徳三郎氏
 歳暮禮状 全 那賀郡 瀧彌平氏
 蓬庵公書翰 全 賀島幾太郎氏
 蜂須賀家文武有功士小履歴 全 鈴江弁吉氏
 蜂須賀侯系譜 全 森丹平氏
 蜂須賀家由來書 全 湯淺佐太郎氏
 蜂須賀家系譜 全 宮崎寛太郎氏
 茂詔公告論 全 全 山本舜道氏
 御目見並願紙面直宛申付覺 全 全 森良二氏
 初て松平の稱号を賜ふ記事一卷 全 全 湯淺高太郎氏
 全 寫 全 他國御出勢人夫手配觸書
 公方様穩便に付御觸書 全

御東下に付心得方御觸書 全 全
 御家督被仰に付漁獵解禁御觸書 全 全
 兵粮米請書書方達書 全 全
 太守様御昇進御恭悅申上控 全 全
 蜂須賀家御歴代 全 海部郡 池内徳藏氏
 太守様御直筆姓名 全 全
 劍槍砲術稽古組織書寫 全 全
 至鎮公大坂軍の控 全 全 勝浦文太郎氏
 蓬庵公御狀寫 全 全 坂東覺心氏
 舊藩主御葬儀配役書 全 名西郡 大栗太郎兵衛氏
 淨篤院様御通棺人足馬割帳 全 板野郡 吉田次郎氏
 御遺髮傳送役人數指出帳 全 全
 淨篤院様御通棺に關する書類 全 全
 長州征伐に關する書狀 全 多田幸太郎氏

水主役に付願上覺	全	里浦村長
寛政五年憐愍篤實感狀	阿波郡	佐藤永太郎氏
年頭御目見仰付書	全	
蜂須賀家系譜	麻植郡	武智魯平氏
繪圖面	全	
蜂須賀家書	全	石原六郎氏
太政官御回達寫	三好郡	來代儀一氏

政務

端山村諸事定條々

定條々

端山

(侯爵蜂須賀家所藏 御代々様御書寫中抄出)

一今度南源六並端山百姓等田地出入之族惣方不相届候即雖可加成敗儀候先代官申付様惡に付而如此成來仕合偏先代官越度候され共彼者今は當國無堪忍上は不能是非之沙汰に然間面々科をも令赦免如前々立置候條忝難有存自今以後は似相之奉公不可存油斷事

一端山並奥分肝煎替に付而西岡田家へ八藏可罷移候又一忠にて次郎六郎家へ西岡田平野罷移諸事可申付事

一今度之申事付而互に自然遺恨に存構もなき公事口論なと仕出候は、先手之方可爲曲事縱一方無謂事申懸候共郡代官へ申聞其指圖次第可致覺悟候若代官事於不相澄者當津へ罷下可致其沙汰事

一右之ごとく所替仕に付而面々名子並下人自分相拘置者之外一人も百姓召連間敷事

一兩方公事役之義如此以前少も相違不可有事

右定置所於相背者忽可處嚴科者也

慶長七年卯月十八日

紹雪(花押)

一二四
侯爵須賀家所藏
御代々様御書寫中抄出

三好郡定書

三好郡

- 一 藏入之儀若代官下代仕様悪候か又は風俗違令迷惑百姓等分散候在所遂穿鑿可申上事
- 一 政所令中絶在所は其ゆかりをそだて可相定事
- 一 從此跡如申付新開に可成地不寄多少可申付候其年は立毛作人に可遣候從翌年は相應之年貢可在事

付其年荒候地有之而郡奉行見及候は代官に申届作可申付事 以上

慶長十七

卯月六日

至 鎮 印

政所其他へ申付御狀

侯爵須賀家所藏
御代々様御書寫中抄出

- 一 政所下人太郎二郎後家並むすめ貳人都合參人之分政所に可遣事
- 一 半右衛門百姓宗右衛門下人四郎右衛門前々のごとく宗右衛門に可遣事

隠居相望者其他に付申付覺

（鶴島市 西尾チカ氏所藏）

- 一 小性共不依老若隱居相望者有之候共取次仕間敷候申立至極仕職におゐては内證可申候事
- 一 小性共不依誰々身上不罷成訴訟申上者於有之は罷致吟味不應其身借金等仕及迷惑候は取次可致事
- 一 役人に罷成度ご存訴訟申上もの於有は江戸供相勤罷歸る其年申問翌年家申問事
- 一 中並之役銀等可申付候條能致吟味向後可申候事
- 一 小性共手前不成役人相望もの在那仕度由申候は其分に可申付候左候而年月事久敷は申問敷候出入四年以上相望もの有之候は取次仕間敷事
- 一 新開山山林望申取次仕間敷事付面々知行替訴訟是又取次仕間敷事付面々井水替訴訟之儀於有之は取次不仕其もの仕置所へ可申届由可申渡事
- 一 小性共召仕下々之儀に付出入仕間敷事有之候は申問敷候由申候か萬一我等へ爲申問敷候由申候は下にて事済可申候之者申問敷候は下にて事済可申候不及言裁許所にて遂穿鑿程之儀に候は尤其分に可申候事
- 一 小性共横子たり云云共奉公相望か又は番等に入候へご申上者有之候は取次仕間敷候不及言次男之義は猶以右之旨可相心得事
- 一 小性共訴訟の外不依誰々何様之義申問候共取次仕間敷事以上

忠英 花押
西尾左京ごのへ
西尾敷馬ごのへ
慶安三年十月六日

大工其他御作事御用に付 申上覺書

（鶴島市 立石成人氏所藏）

- 一 大工上々上中に仕職能々致吟味其時々に梯夫左衛門篠原勝左衛門に申達相定可申事
- 一 御作事御用之刻大工無滞急度可申付事
- 一 他國へ御用に付御國大工遺刻吟味仕職成棟梁相定可申付事
- 一 御作事出来寄大工外宛指戻し申職依怙最負無之指引可申付事
- 一 大工共不相届義有之候は、杖衝共に吟味仕可申付候事

右ヶ條之外梯夫左衛門篠原勝左衛門存寄申付義有之候は、無油斷致吟味可申付者也
承應元年極月廿七日
長谷川 越前
山田 豊前
賀島 主水
立石五兵衛殿へ
美馬十兵衛殿へ

一 半右衛門手前へ宗右衛門百姓役年中に夫錢として銀子五拾目此外壹ヶ月三日宛半右衛門めしつ
かふへく候以上

右之通給人政所百姓に申渡相濟可申者也

慶長十七

八月四日

市原左近右衛門とのへ

山田源太左衛門とのへ

在大阪申付に付覺書

覺

(侯爵蜂須賀家所藏
御代々様御書寫中抄出)

一 其方儀在大阪申付上は島田清左衛門殿久具忠左衛門殿御両所へ節々罷出相應之御用等承御兩心
無之様に可令覺悟事

一 關船六端帆一艘並飛脚舟貳艘不斷付置候條從江戸罷上使者飛脚其外急用無油斷可相叶事

一 阿波淡路を罷登下々於大阪口論之族先此方之者と早々召籠置其上様牀承届可隨其事

一 阿波淡路之船共大阪に有合刻兩國之侍下々至大阪下合右之舟罷乗候は、縦千松中間並蓬庵飛脚
にても候へ一人に付而せい錢貳十文可遣之候馬は五十文たるへく候但荷物於有之は其高下によ

つて可申定事

一其方義對千松我等不相屈族於聞及は何時も召寄相尋可隨其候卒爾に人の申成を以聊隔心を存間敷事付大阪町なみに下々申成雜説於承は便宜次第可申下候雖無詮候自然心持にも可成哉之事

以 上

右之條々常に相守不可存油斷者也

元和 六

蓬 庵(御判)(御印)

九月四日

大多和長右衛門とのへ

走人等に付制札下付御狀

(候時録須賀家所藏 御代々様御書寫中抄出)

其谷百姓等近年餘多走過分にへり候由申越候間左様之改之ために友傳指越候先年之家數並人かすの帳一札又牛馬悉改付候帳二札次に其谷中にて牛馬うりかい之刻むらさきの役銀相定□□□□請狀合書物數四ツ又其元萬定書制札一枚此分只今遣候此制札之旨能々令合点其覺悟肝要に候此分にさへ覺悟候はゞ代官惡事も又百姓惡事も有之間敷と存候能々よませきと合点專一に候將又其元藏に有之麥並わた□など早々有次第下被可申候油斷有間敷候恐々

九月廿八日

はうあん(花押)

芝原九郎二郎とのへ

貞光代官取札覺書

(候時録須賀家所藏 御代々様御書寫中抄出)

覺

一貞光代官之義自今以後喜右衛門に不申付候條當納之義其方彼地に罷有而可申付候事

一藏のかぎ村瀬太兵衛かたを請取則内の諸道具太兵衛久兵衛召連懇に相改帳をかため其方判右兩人も判をさせ可被置候事

一藏之外何方にも年貢に取候萬代物少も於有之者あつかり主申出候へ可被相觸候事

一喜右衛門召仕候もの定而妻子一所に可有之候彼者共懇に相尋其上いさゝか不相隱由一札を可申付候彼者手前へ使者喜右衛門ひこ齋藤勘兵衛を可申付候刻勘兵衛も加判させ可申候縁類其上隣所に候間ふしやうにて候事

一喜右衛門家内之道具一色も外へ出間敷候其様子跡より可申遣候事
此旨少も不可有油斷者也

九月廿日

蓬庵(御判)

芝原九郎二郎ごのへ

覺

一喜右衛門妻子命之儀無相違候間齋藤勝左衛門に何も改可渡候喜右衛門腹をさらせ候上悉けつしよにて候乍去子共の刀わきさし女房其外女共わんぼうなどの儀何も着候て罷出所少も異義有間敷事

一召遣候おとこ共刀わきさしさせ候間敷候わんぼう計にて可遣候事

一か様之体に候間屋敷之内よりやうじほこの物にても持出間敷候事

一喜右衛門かし付之義板升物何にてもかりし者共徳に可仕候事

一召出つかい候小者下女之儀則親兄弟の方へ返し可遣候事

一藏に残有之分喜右衛門覺之通書上候うつし遣候能々改肝要候藏之内へ預置諸道具にても俵物にても少も遣間敷事

一當年貢之儀彌不可有油斷候事

己上

九月廿七日

御印

芝原九郎二郎ごのへ

貞光山里政所其他定書

定

(候時録須賀家所藏
御代々様御書寫中抄出)

一貞光山里當檢地之上南八藏並四郎衛門次郎衛門前々之在所へ令歸住年貢等無油斷可申付候三人之者如此候條次郎左衛門彦六郎其外名子以下至迄悉如前々歸住可仕事

一今度南親子之者知行令加増都合百貳石余遣置之條如折紙六兵衛喜右衛門罷越田島相改可渡遣之事

一政所共之事三人之内壹人は知行遣置候殘貳人諸藏納なみの政所給遣上渭津致上下刻其遣錢小百姓に一粒一錢申懸間敷事

一不及申竹木板薪等に至迄百姓に申懸儀不可有之候但政所普請等仕におゐては年中に一日二日屋ごい食くはせ召仕義は不苦事

一爲代官恣に所之竹木無左右不可切取之事

一代官として私用に百姓召遣儀不可有之事

右之旨一点も於相背者可爲曲事者也

慶長十一年五月五日

蓬

庵

(御判)

組中勤怠取調御狀

候時 蜂須賀家所藏
御代々様御書寫抄出

申渡條々

一 組中若衆共或軍役等精入或武道具等心懸無油斷人は有姿可被申聞候事

一 軍役等不入精御普請等も不懸心入躰是又急度可被申聞候事

一 於組中萬さいかんに物之らちをも可明仁候は是又可被申聞候事

右旨無油斷被令吟味善惡書付我等かたへ可被上置候爲其如此候也

寛永元

はうわん

十一月十一日

印 稻田勘解由とのへ

身上其他に付申付御狀

候時 蜂須賀家所藏
御代々様御書寫抄出

其方奉口心持之事

一 他所之借錢等せすいか様にも身上成行様に分別肝要之事

一 領知方無沙汰にて人に任置之條年々荒かさなり百姓不成立様に相聞候沙汰之限無是非候當年よ

り百姓等召寄直様牀聞届作食種子以下我等可申付候間荒地相聞失候ものも歸住候之様に堅可被

申付候由木木岐之儀荒分浦々百姓家役か人役に田を打懸相聞候様に可被申付候事

一 我等之ため可然儀と存事に候はく身上に應ずる程は諸篇不可有油斷に付家中之者共よく目をか

け随分相救様に分別第一候之事

一 當國に堪忍之諸侍中へ多少老若によらすいかにも慇懃に仕何も無如在様に可被仕成候付右諸侍

中にて或は惣別知行悪敷或は年により水損干魃にあいはたと身上不成仁在之時何の度も對拙者

訴訟使可被仕事

一 自然爲私似相に道具等之一種も出儀に其仕様可在之譬は右如申身上はたと不相續者か又は其身

に過たる造作相企者なごには爲合力自然聊も可出遣かむさと物を施儀はいかなる知音親類によ

右條々其乍可突我等異見初にて候間常に守之而其心得可畏候也

十二月十二日

阿波守

家政 (花押)

細山帶刀殿

扶持其他申付御狀

(候爵蜂須賀家所藏 御代々様御書寫中抄出)

何も油断ましく候以上

態可申遣所休齋歸候條如此に候

一彼入道に貳人扶持來月其元に而可遣候右に文左衛門に如申屋敷一所廻之數共に遣候彌其心得尤に候

一今度此屋敷作事に付而其元々材木彼是取寄候請取共能取寄尤に候頓而平三郎六郎左衛門指遣此度爰元取寄之道具極可申付其心得尤に候

一其元年貢米之儀急度皆澄候様に簡要に候我等存者例年々當年者年貢別而かたく申付候

一時分柄に候間勝浦川の口役銀子は又催促尤に候文左衛門方へ別紙を以可申候へとも關ヶ敷候間

同然に候謹言

十一月廿九日

蓬庵

宗一 (御判)

松軒

文左衛門とのへ

走人に付御觸書寫

覺

(名四郡林香吾氏所藏 御觸控帳中抄出)

一從讀岐當國へ走人之儀何も寛永貳年居懸之在所へ可相付候條先那奉行之時に相濟候も右之通寛永貳年居懸に可申付事

一國中藏納給所に不寄百姓等万事不届之族有之は其代官給人に不及斷に當國之義は益田主殿森左太右衛門淡州は小南加々右衛門稻田次郎五郎爲覺悟如何様とも可申付事

阿波淡路兩國と土佐國人取替申定書物之事

一久敷走人は取遣仕間敷旨此度於江戸被仰出候然は御條數を相守寛永十一年正月以前之走人は取

遣仕間敷事

- 一御領分阿波淡路へ參此方に而夫持女之義は女房子どもに此方に置可申事
- 一寛永十一年正月以後之走人は取遣可仕付走人阿波淡路方於兩國女房持候は其女房之義は御留置可被成候俾有之候は男子は父に付御戻し可有女子は母に付御留置可被成候並走人借物等之儀以吟味之上本分迄返辨可申付事
- 一走人於重科之輩は縦寛永十一年正月朔日以前に雖走來其理次第取遣可仕事

右申定之通自今以後相違御座有間敷也仍而如件

寛永十一年極月廿七日

野中主水

益田主殿助殿

森左太右衛門殿

松平右京様被仰合

諸公事出入寄合僉議申付覺書

(日比野參次氏所藏)

覺

一面々預郡之内又は他郡と諸事出入於有之は何れも奉行共會所へ寄合可相談行違一坐不仕者には
 重而件之出入可申聞但六七人迄は寄合可有僉議事

一諸事出入之義に付而聊なる事を面々遺恨に存物毎そかまじき儀申懸於妨成者聞届切腹可申
 付事

一諸公事出來之刻双方より儘成墨付をとり先年の壁書を以可相捌萬一壁書にも相違或相談之上に
 て事不濟出入之義は公事人方より目安に銀子相添益田主殿介森佐太右衛門方へ其郡奉行南方召
 連可罷出事

一主殿介佐太右衛門出入之段々聞届糺理非以先例公事相濟者歟又は相談にて存寄義指圖於有之は
 無異儀落着可申付万一兩人不能分別義賀島主水中村若狹稻田九郎兵衛方へ兩人令同道彌裁許之
 上を以勝負可相究事

一他國より當國來走人之儀多分國奉行方へ可申來然者右兩人より面々方へ穿鑿可仕旨於申渡者
 無油斷相改若走人申分も有之は其趣を能令吟味兩人迄召連罷越指圖次第返可遣事

一當國より他國に罷越走人代官給人才覺を以連返義於不成者國奉行へ申聞狀をとりて呼戻若對代
 官給人訴訟有之は指出致挨拶肝煎可爲尤第一國之者他國之遣事ため不可然義と常々可有覺悟事

一在々新義之竹木林並井水川除新出之地加様之義奉行を雖付置自然存寄義も有之而面々見及所林
井水新田等普請申付可然義有之は右之奉行方へ可令内談事

一當國諸法度制札之儀何時も國奉行方へ申理取可遣事

一給知百姓之出入に給人指出もの有之は法度之旨可聞次奉公人ご百姓出入之義は給人と郡奉行可
云談事

一不至百姓以下雖理持其身無調法故其子細と申とかぎるもの有之は能心を付理を育儀可爲肝要事

一何れも寄合裁判之刻申度儘有度儘之牀大に可爲曲事然者面々心得のたれ横目として吉田儀兵衛
申付指出候事

一泊鷹野鹿狩之刻道迎語夫其外在々にて諸役に指仕人數其郡之者計於相勤者可令迷惑然者午寄次
第他郡のものにも諸役可申付年中召仕人數郡限帳面に記し置毎年令勘定横目之者共に可相渡事

一知行付之奉公人百姓其外當國之もの不屈有之而諸給人令死罪義有之は何時も面々方へ可相届然
者致吟味輕科之者は過錢申付令助命於重科者在國之節は相窺留守之刻者國奉行に申届其上を以
可斷罪事

右條々堅可相守者也依如件

寛永十七年極月二日

忠 英 (花押)

日比野六太夫ごのへ

諸事申付書寫

(名東郡富永久基氏所藏
撰玉誌中抄出)

一城外は不言城内其外如何様之義致出來候共番所欠申間敷事

一組頭は上下着可致與子は不斷袴計可致着候但節句朔日十五日總様上下着可爲尤事

一不及言殿中に而高聲謔等□□堅停止事

一目見へ候者刀床に置候得は其日之當番相理床に置を相守可申事

一面々召連候下々高聲小歌淨瑠理たはこ給候事停止猶下目附申付候條堅相守候様可申付事

寛永十八年三月廿七日

忠 英

居屋敷差遣に付御定書

定

(侯爵峰須賀家所藏
兩國法式之冊中抄錄)

一古屋敷新屋敷並下屋敷相望者於在之者能令吟味其旨可申窺事

一新屋敷遣之砌能見計可相渡若不能分別儀於在之者可申窺留守之節者仕置之家老に可相尋事
 一新屋敷間口之儀知行高從百石百五拾石附無足之者迄は表口拾九間計裏へ貳拾間程從高貳百石五
 百石迄は表口從貳拾間貳拾五間迄裏へ從貳拾間三拾間迄應其身相計可遣之雖爲少々間口可遂吟
 味附屋敷大小之儀縱雖小身可然作事相望者在之は其身任申趣少は廣可遣之並依屋敷形割殘等貳
 間三間之儀者外へ不構子細於在之者其儘可遣之不依誰屋敷相望者其町並從一方可相渡若町並之
 外にて不渡して不叶儀か惣而於新屋敷は代官に相尋其所之者指而迷惑不仕趣能聞屆隨其屋敷可
 遣之事

一屋敷替申附節替屋敷之儀縱本屋鋪何程廣雖在之右相定置屋敷之間口應其身可遣之但外之構於
 無之者從其分領少者廣可遣之並面々屋敷替於相望者本屋敷廣雖在之定置間口を相計應其身可遣
 之附下屋敷を召上砌替屋敷新下屋敷相望者在之は代官に能相尋指而用にも不立據地屋敷の大小
 應其身可遣之事

一自今以後下屋敷に遣之儀知行高千石以上の者に可遣之事

一新屋敷遣之及貳個年作事等不仕者於在之者作事之儀三度迄者令催促其上にてても屋敷構食着於無
 之者急度可召上但作事相延子細在之者其趣可申窺事

一步之者並弓鉄炮者中間小者屋敷之儀定置間口可遣之依て所割殘之地界在之者從定置屋敷少は廣
 可遣之於然は如有來應右之餘地年貢代官所へ可納之附新屋敷遣作事等不仕其屋敷へ不移内は年
 貢可納右兩條代官方へ年貢可納由可申届事
 右條々堅可相守者也

承應二年二月十二日

右同御文言之寫稻田九郎兵衛山田豊前々伊藤平太夫近藤七郎左衛門方へ遣書付只今御普請
 奉行岩間半兵衛矢尾田加左衛門方に寫在之也

稻田四郎左衛門とのへ
 關九郎左衛門とのへ
 高島與右衛門とのへ

家中侍其他諸事御定書
 定

(候爵録須賀家所藏)
 兩國法式之冊中抄録)

一家中侍不依大小子を數多持及迷惑他國江遣之度於存は可申伺附知行取身体不依多少實子不持輩

養子於仕度は下にて不致契約以前是又可申窺事

一諸士不依誰他の衆憑我等へ訴訟擣敷令停止事

一侍不依大小至又若黨迄諸事擣敷但令制禁訖並面々振廻致約束料理雖申付一汁或二汁三菜肴一種酒三返此外無用但他客の節は可爲各別事

一我等家中江請待の砌膳部金銀彩色定紋用亦是鑄料理可爲無用膳數三迄曳物三肴二種栴臺木地一對可仕我等居所壹間の外疊改儀停止訖並供人の儀用人傍扨從右筆小扨從醫者茶道石何茂當番の者可罷越然者勝手振廻之獻立二の膳迄引物二肴一種可仕附爲肝煎相詰者從弟婿迄は可任覺悟但雖不縁者亭主就用所雇申度存者於在之者其趣横目之者迄申理可應其意然上は外人前後見廻停止之事

一乗物之儀知行千石以上並家老之嫡子付或歳五十以上或病人不私他行の砌可乘之醫者法体は可爲各別事

一不依誰婿取嫁取之規式振廻以下萬事華麗無之寄身体手輕可令沙汰然上は前後相詰者從弟婿迄は各別其外爲祝詞始終共罷越儀茂令停止事

一縁者親類知音至迄内外共年頭節供亦者如何様之雖爲祝儀不依何不可執遣之附憑敷諸勸進取沙汰

令禁止事

一侍不依大小一類相果砌前後寺江可罷越者從弟婿迄は面々可任覺悟勿論茶湯の規式穩便可令執行事

一鷹敷免之者知行千石以上但雖爲其以下指免者之儀可爲各別事
右條々堅可相守者也

承應二年二月十二日

公儀御普請其他に付御定書
定

侯爵蜂須賀家所藏
阿國法式之冊中抄録

一公儀御普請在之砌當番之家老は不及言當番之與頭寄合組之内兩人從前年諸事用意可在之裁判之儀兼々申附之趣面々茂可得其意事

一與頭之内兩人宛萬事相觸儀半年代當番相定與頭中役前等無滯様申附之條可得其意事

一寄合與諸事相觸儀は稻田四郎右衛門西尾兵庫爲兩人寄合與中役前等無滯様申附條可得其意事

一鉄炮頭之内三人宛半年代當番相定鉄炮頭中之役前等萬端無滯様申付條可得其意事

一家中役儀相勤面々於國中用事申附候者七拾五匁懸十二ヶ月に割符指引可仕附百目懸赦免之者は百目懸右同然割符可在之事

一家中役儀相勤面々或江戸供か或在番罷越者前年之役銀七拾五匁懸之半役貳拾五匁貳口六拾貳匁五分懸可赦免之然上者百目懸十二ヶ月に割符爰元罷立歸迄往來之月數程役銀引可遣之勿論何十ヶ月在江戸仕共右之趣以算用指引可在之事

一不依大身小身侍役人之内江戸立歸之使に遣節各別造作料遣上者役銀之指引不可有之事

一小姓共江戸供番之内役人之訴訟申者於在之者江戸供相勤罷歸其年申伺從翌年家中並之役銀可申附若不叶儀にて重而江戸前に訴訟申者之は右定置通從述之役銀可取立事

一役儀從相勤者之内於召出罷從は江戸罷越前年之役銀七拾五匁懸半役二拾五匁懸二口可令赦免事

一從小姓役人罷成者從役人扈從召出者其時之從奏者面々方へ以書付可申届の條隨其定通役銀指曳可在之事

一役儀指免者之儀從奏者面々手前へ書付可取置口上にて若申聞者在之は不可承引事

一家中總役儀銀子請者或二分役或三分役仕砌者右如相定役人可赦免自然 公儀御普請在之於國中半役之役人召使砌可爲各別然者在江戸何ヶ月雖相勤罷歸上者日數三十日之休遣之有來役前惣

並に可相勤之事

一家中侍共年々役銀指上者前後之次第を可書記然者與頭寄合與鐵炮頭月番之者此趣可申渡家老中役銀指上前後之儀は面々方にて書記毎年暮毎に可指上之事

一扈從共江戸供番之内一供赦免之者は役銀七拾五匁宛貳ヶ年可召上縱幾供赦免之者雖在之右之以積重而江戸供に罷越前年迄役銀可指上事

一侍役儀從相勤者之内自國他國立歸之使等に遣之砌其者手前有來役銀無滯可指上然者從罷立日歸宅迄之扶持方可申附之事

一家中不依誰役銀令赦免之者貳拾五匁懸無滯可指上事

一家中侍共新知道之者從其年本役可相勤雖然新屋敷遣二三ヶ年之内に似相之作事等於仕者其年之半役可指免之事

一家中諸士跡目之知行正月二月三月に遣之者には召上る知行分夏所務不可遣之四月五月六月に遣之者には夏物成可遣之然上は其年之役目之儀本知之高に元役割符其身に遣分之本役と相改役と押合半分に割符役銀可召上不及言從翌年は相改役前にて役銀可取立事

一七月八月九月に跡目遣之者には召上知行分秋所務不可遣之十月十一月十二月に遣之者には秋物

成可遣之然者其年之役目之儀持懸之役高にて役銀可取立之事
右條々堅可相守者也

承應貳年貳月十五日

(御在判)

稻田四郎右衛門とのへ
關九郎左衛門とのへ
高島與右衛門とのへ

江戸番之者借銀覺書寫

覺

(德島市那波利良氏所藏
阿波古記録中抄出)

一江戸供番之小姓銀子借用仕度趣於申は利足加借用可申付返上之儀は右借用元利三ヶ年相濟程知行高可指上事
一相役相勤侍江戸供仕砌銀子借用仕度趣於申は小姓並高百石に付七百目宛如有來壹割半之加利足借用可申付之返上之義は元利とも貳ヶ年相濟程知行高可指上事
一家中侍共立歸之使江戸遣之砌借銀仕利足之義從正月六月迄壹割半從七月十月迄七分半十一月十

二月に罷越候は無利若し翌年迄返上不成者は加利召上如有來知行指上借用可申付事
一借銀仕度と申者於有之は前々之借銀遂吟味其上に而可申窺留主之砌は仕置家老へ相尋借用可申事

承應貳年二月十八日

(御在判)

稻田四郎左衛門殿
關九郎左衛門殿
高島與左衛門殿

江戸立歸之使遣砌侍共借銀之覺

一貳貫五百目は 從千八百石貳千五百石迄
一壹貫五百目は 從千石千七百石迄
一壹貫目は 從六百石八百石迄
一七百目は 從四百石五百石迄
一五百目は 從貳百石三百石迄
一三百目は 百五拾石

一貳百五拾目は 百石

右之通自今以後相定候條借銀仕者於有之は元利とも壹ケ年相濟程知行所請取以其上可申上也此員數之外誰之雖申承引仕間敷者也

承應二年二月十八日

(御在判)

稻田四郎左衛門殿
關九郎左衛門殿
高島與左衛門殿

撫養渡海其他定書

定

- 一 撫養渡海之往還人無滯様に可申付事
- 一 万事法度堅可相守事
- 一 往還之渡口に候條渡守義は不及言庄屋百姓以下至迄物每律義様に常々可申付若不届者於有之は或國奉行代官へ申渡可行罪科事

(德島市那波利貞氏所藏
阿波古記録中抄出)

- 一 天氣惡刻は所之者船頭相談次第可相渡萬一理不盡可渡と申輩於有之は不依上下可爲曲事事
- 一 往還人不依上下雖參集貳人三人迄は即時渡海不可申付半日程乘人相待可取渡但西之丸並我等使者飛脚又は從他國來使者飛脚は假雖爲壹人無滯渡海可申付事
- 一 不依何者其体不思議者又は走人様於見立は押留能々令穿鑿以其上可有沙汰事
- 一 往還人不依何者宿取罷有者盜相働又は及強義令打擲渡守者尤可爲曲事擲捕か不然は留置急度奉行へ可相届事

一家中之下々直人之様に申來可令渡海旨於申は擲捕奉行入る可相届事

一 依天氣撫養之渡海不成節は穴加へ可取渡事

右條々堅可相守者也

承應四年二月三日

(御在判)

長谷川七郎右衛門とのへ

安宅御奉行申付覺書

覺

(德島市那波利貞氏所藏
阿波古記録中抄出)

- 一就用水主陸之用事之砌右両人手形次第可申付事
- 一安宅之義万事其方以裏判算用相調可申事
- 一一致出船何方へ参り候とも海上泊に少も無油斷様に兼而船頭水主に至迄堅誓紙仕せ上下共に日數不輕様可申付若令油斷族日數延者可爲曲事尤方々浦々以手筋申者其段能開屆義專要也然上は常々水主共之内へ申含油斷之義雖爲同類於申聞は彌以穿變上赦其科褒美遣之義可爲尤無左從他所油斷之趣於開屆は船頭は不及言水主共急度可令罪科事
- 一萱引之義扶持人水主にも可申付事
- 一船口具木綿麻鐵其外何に而も相調砌賣人手前隨分可入念疊之表は相郡(尋か、と傍書せり)奉行自然不有合時急用候而不叶時は右同前可相調事
- 一安宅万事に付方々へ申遣義其方以手形可相調事
- 一船之揚下坏に役人安宅之加子不足之砌は蜂須賀一學中尾又右衛門方へ書付有之以町中之人可相調事
- 一水主共壹ヶ月三日宛爲休可申其上に而相願於役義欠候者以支配當扣可申事

- 一安宅藏三ヶ年に一度宛改可申並万端算用方一ヶ年限に可申事
- 一沖須に七端帆以下之船少々可指置事
- 一江戸大廻之船水主應其船可申付事
- 一扶持人水主扶持方支配之義依其人柄見計可申付事
- 一水主之義は不及言雖爲船頭不屆者於有之は可令罪科事
- 一至船頭水主迄如有來每年壹度宛誓紙可申付事
- 一船荷物之義安宅へ申付事
- 一播養苦之義急用之砌は可用候常々取寄置義は可爲無用事
- 一安宅諸奉行勘定之義其方罷出可相改事
- 右條々相守可令沙汰者也

明曆三年五月廿一日

(御在判)

猪子七兵衛とのへ

公儀御法度其他御定條々

(侯爵蜂須賀家所藏) 阿國法式之冊中抄録

- 一 公儀御法度之趣常々存大切下々に至迄堅可申附也若違犯之輩於在之者不依上下可爲重科事
- 一 供之侍不依上下道中並於宿に諸事行儀正敷可相嗜面々召使下々は猶以堅可申付事
- 一 諸士下々共に於門外町屋物見辻立制禁之殊比丘尼遊女等面々長屋へ呼入儀は不及言惣而出合好色之道付猥之輩右可爲曲事 不依誰町方へ罷出振廻等給儀令停止訖若不叶子細在之者用事之趣申窺可罷出奥方に召使者は黒部孫兵衛渡邊平左衛門若山佐太右衛門に申斷可出自然不屈之仕合在之於後々雖聞及其科難逃候條可得其意事
- 一 不依何事門外に罷出砌於門番所用所之大途並刻付迄以自筆帳に記置歸宅之節茂刻付可仕但屋敷住宅之者は可爲各別尤從下屋敷上上屋敷之相詰者兩屋敷共出入之刻帳に記可申並從町屋敷當屋鋪へ出入之者茂同前之事
- 一 屋敷中在々面々就自分之用事門外之罷出砌者何時茂其品申伺可隨其旨歸宅之節者横目之者に可申惣別屋敷中門出入之儀晚は可爲六限若不叶用事付夜更迄在之者其趣横目之者可申理奥方召使者は黒部孫兵衛渡邊平左衛門若山佐太右衛門に可申斷事
- 一 上屋敷に在之者共壹ヶ月三度宛湯風呂令救免之條非番之砌可罷出右三度之内にて他所之行見廻

可相勸勿論其節者每度以書附右之者共可相理歸宅之節茂同前下々之儀以札出入可爲仕書付並札無之者於罷出者其身は不及言番人可爲曲事

一 他所人並諸浪人長屋江呼入儀堅無用也若不叶子細在之者兼而可申窺其外不時に罷越者は門外指置其人並連者壹人通候様門番人申付置之條其砌者書付之者に相斷罷出可令對面尤從他所之使罷歸節は面々召使者指副門番に相理出可申但留守居之者方へ參者は可爲各別事

一家中之下々上屋敷下屋敷町屋敷使取遣之節入札申附置之條於門番所相改可通其外之屋敷茂出入右同然之事

一 小扨從共詰番之砌我等令偃息在之か亦は留守之節茂宿々へ不罷歸可相詰事

一 我等用所調在之砌於客來者奏者番之者無遠慮罷出可申聞事

一 在江戸中我等前にて作法又は何事にて不調儀國元他國へ申遣之儀令禁止條若違犯之輩於在之者依事可行罪科事

一 在江戸中並道中上下共之侍江戸住宅之面々不依大小互寄會振廻者不及言茶荳若之外當坐之菓子茂出儀堅令停止訖若難逃子細在之而振廻用意之節は前廉横目之者共相理可隨指圖然時は一汁三菜酒三□此外令制禁也但他客之馳走は可爲各別附他客在之砌肝煎に□度者於在之者は又横目之

者に可申理不時之刻は後日に横目之者に可相理留守居之者方へ參候他客は各別之事

一大小姓小扈從番所へ辨當取寄義不及言茶酒菓子等迄面々從宿取寄給儀令停止事

一於長屋高聲口論並大酒給儀上下共停止之事

一千松初其外一家之間へ少之土産も相送儀不及沙汰正月五節供に看等指上儀堅令停止也然者常々

菓子餅以下上事制禁之但爲改祝儀之禱者可爲各別江戸上下之節□並土産贈答之儀停止勿論於江

戸傍輩中菓子看等取遣之儀堅令禁止事

一惣而人之噂惡様申成亦は中言申義大可爲曲事傍輩中挨拶惡者於在之者隨分令和談儀可爲肝要少

々挾遣恨不和順仕合且者不憚上相似者か互令堪忍勤奉公儀別而可爲忠節事

一今度供罷越者共於江戸他國者召拘儀可爲無用定之人數若就不足召拘節は阿波淡路兩國之内儘成

請人在之者其趣横目之者に相斷可召置事

一惣屋敷門外に依男女童罷出立休儀堅令停止事

一小扈從共就衆道之儀誓紙仕上は雖不及子細面々茂其趣相守行見廻堅令禁止也若用事於在之者

以小扈從横目可申届親子兄弟伯父甥迄は可爲各別但雖爲遠縁者不叶用之儀在之者横目之者に相

斷下横目之者召連見廻可申事

一對直人又者不儀之仕合於在之者其身は不及沙汰主人迄茂可爲越度條常々堅可申付事

一博奕搦敷儀仕者於在之不依上下可爲曲事事

一從長屋之窓往還の作法正敷可相嗜並廂道筋に猥に物を置挾候様不可仕附面々長屋之前掃除等□

々心懸可申付事

一有來長屋之住居仕替並戸口二階之口明替又者柱等伐候儀可爲無用圍爐裡明候共兼奉行人に可相

理面々罷在長屋爲自分互入替儀堅可令停止事

一歩行者以下並住宅之者他所人長屋へ呼入節は其頭に相理可出入不然於呼入は可爲曲事附他所之

者雖爲一夜相留儀堅令停止□右之者其門外に罷出用事相調節は是又其頭に可申伺事

一就諸事横目申附條上下共作法正敷能々可相嗜事

右 定 所 如 件

明曆三年九月六日

渭津山下廻市町中申觸覺

渭津山下廻市町中申觸覺

德島市那波利貞氏所藏
阿波國古記録中抄出

- 一就役義訴訟申上度旨於有之は可申出也隨其趣可令用捨事
- 一町奉行並下代付其町之年寄組頭等に對して訴訟於有之は可申上事
- 一對奉行申分於有之は可申上事
- 一何事によらず難義之旨於有之は可申上事
- 一諸法度從先規至今令違背之義於有之は可申上候依其趣可令褒美事
- 一右之趣職人商人假難爲當時之族人於申出依其斷可令沙汰至る後にも訴訟の義於有之は家老共
方迄可申來者也

承應元年霜月七日

右同御文段

寛文七年六月廿一日

同十三年二月廿五日

留守中諸事申付覺

萬治二年出國之時分主水方へ

(候爵録須賀家所藏
兩國法式之冊中抄録)

覺

- 一留守中用方之儀於被相窺者長江縫殿かた迄可被申越事
- 一家老共金銀米借用之儀何時も其方へ被申聞候は、江戸へ可被申越候但急用之節者其方可被任覺
悟付侍共並百姓共借米借銀之儀申者候は、隨分被遂吟味至極之義在之は應其借し可申萬一覺悟
にも不罷成儀は江戸へ可被申越事
- 一國中侍下々に至迄大法相背者出來之時は江戸へ可被申越候但急用之義か又者有來事に候は、其
方可被任覺悟事
- 一留守中俄に金銀用之儀出來金銀不足之節は家老中被致相談何とぞ才覺被仕其上に而金銀扶持方
等迄其時節に應夫々に可被申付事
- 一他國越急使者入申刻は小野兵太夫團善右衛門今田六郎左衛門右三人之内を可被申付候若輕使者
入申節は其方以意得可被申付事
- 一何事によらず若其方思案迄にて難被申出儀は相殘家老中と可被致相談候其旨何れにも申置候事
- 一安宅船之義自今以後仕置と一所に申付候旨馬詰半兵衛稻田四郎左衛門猪子七兵衛に被申付舟道
具以下勝手に罷成候様に可被相心得事

一船之儀拾貳端カ小早迄壹個年に四五艘充爲作申候間可被得其意候事
 一拾六端計船行之壹貳艘も作申度候間船道具兼而其心得仕置候様に七兵衛に可被申渡候事
 二月廿九日 賀島主 水殿

土地賣買御定書寫

(三好郡古郷吉右衛門氏所藏
諸提書申抄出)

覺

一田地之賣買自今以後五年切流渡し申付間舖旨申候五年より迄は沙汰仕間布く五年より内は賣手買手可爲挨拶次第に勿論書物にて定可申事
 一此跡永代賣買田地賣手の分別次第本錢を出版返可申事
 一二年已來永代賣買田地は五年切之通可隨其以後は賣手之分別次第本錢遣し取替可申候但賣手取戻す無力候は、五年切以後書物仕直に互取遣可仕五年より内は賣手可任覺悟事
 一賣買田地に付諸事役儀買手次第書物にて可申定事
 寛永九年極月二十三日

右四ヶ條之通被仰出御判形無之其上永代賣之田地本錢次第差戻す筈於相定は在々賣地之出入數多

出來可申哉と但此趣可相守哉と酒部内膳を以相窺候所追て内膳を以被仰出候旨自今以後右四ヶ條之趣不及相守候道理次第に可仕旨被仰出候此趣郡奉行共にも可申渡旨御意加り即刻於御城中中林彌次右衛門沖平六福屋彦太郎右三人へ申渡者也

万治二年亥二月二十七日

野々村 左門
林 大學
蜂須賀 一學

(候時蜂須賀家所藏
兩國法式之冊中抄録)

覺

年頭御祝儀其他に付申付覺

一爲年頭之祝儀我等へ町人共禮申砌樽肴持參無用也目見爲仕者共以扇子禮儀可相勤事
 一町中出入之儀不及言其方裁判尤也町人と百姓出入之砌茂郡奉行申談事濟可申以其上事不行節は可遂裁許事
 一不依何事町中之儀從外我等へ申聞儀令停止從其方可開屆自然違逆之子細在之從他□於爲申聞者其趣其方に申聞以吟味之上可令沙汰事

- 一從他國使者之砌自今以後其方罷出馳走可申付挨拶人雖申附振廻以下馳走振之儀迄見計可申付但輕使者には不及出會事
- 一於安宅船揚下之砌水主共就不足人之儀從安宅奉行其方之可申遣之能々令吟味無左之町人不指遣様申附儀肝要也此趣安宅奉行共にも可申聞事
- 一於市町狼藉人召捕砌は兼定置者に可申付若又大事之囚人於在之者不寄何時可相窺留守之砌は家老中へ可申聞事
- 一市中へ仮初之用事茂從近習之者何時茂其方へ可申遣之此旨自然不存者從外直に市町へ申遣儀於在之者市町之者不可承引趣常々可申含置事
- 右條々堅可相守者也

萬治三年十月九日

(御在判)

嶋 八左衛門どのへ

右同理 寛文七年六月廿一日被仰出右同人へ 但口の一ヶ條は除

右同理 寛文拾年七月十五日數川源太兵衛に被仰出

右同理 寛文拾三年二月廿五日津田平太右衛門に被仰出

町奉行定書

町奉行

定

(徳島市那波利貞氏所藏
阿波古記録中抄出)

- 一於當市中賣買之砌不依上下奉公人對町也(人か、の傍書あり)理不盡之義申懸於令打擲は可爲曲事但依科之趣可遂穿擊事
- 一自國侍中の義は不及言對他客町人慮外成休於仕は可爲曲事
- 一城下女他國へ渡海之砌島八左衛門以切手可罷出不然乘船仕者於有之は其身は不及沙汰船頭水主に至迄可爲曲事勿論手形無之罷出者雖後に相顯不可還其科若相背者於有之は島八左衛門方迄可告來假雖爲同類赦其科可加褒美事
- 一就女猥(此所に、狂か、の傍書あり)義市中へ罷出砌宿仕者於有之は可爲曲事付町人の女も同前之事
- 一直人並又若黨以下市中へ罷越諸事猥族可爲曲事横目申付候條常々可相守其旨事
- 右條々若違犯之輩於有之は速可所嚴科者也

万治三年十月九日

(御在判)

一六二

島 八左衛門とのへ

町奉行

覺

一博奕之事

右從先年數度雖言付彌堅可申付若違犯之者於有之は或は死罪或は可爲籠舍假雖同類申出者於有之は其科ゆるし可令褒美事

一從侍方町人の買付之事

右以相對証文取替可令其沙汰若理不盡之輩於有之は家老とも方へ申出可隨其趣事

一於寺町死人火葬之事

右從先年雖令制禁之彌堅可申付事

右之趣堅可申付者也

万治三年十月九日

(御在判)

島 八左衛門とのへ

讚州御領分より參者に付覺書

(名四郡林者吾氏所藏
踏法度控書帳中抄出)

覺

一讚州御領分の阿波淡路へ寛永貳拾壹年申年以來參候百姓男女共急度致穿鑿帳に仕可進之候其以後抱置候者相添其村々へ返可申事

一借銀借米之義取遣申付間敷事

一御領分の阿波淡路へ參此方に而女房持候者任縁付女房子とも可進之事

一御領分の阿波淡路へ參夫持申女之儀は女房子とも此方に置可申事

一右二ヶ條之儀繼譜代之女に而も縁付同然之事

一生國領分之者未年以前阿波淡路へ參申年以來此度御定之内に御領分へ歸住之者生國次第可仕事

一年季之物本物返し取切共に取遣申付間敷事

一阿波淡路の御家中侍共方へ男子奉公人之義相對次第可被召置事但斷有之者は返可被下候事

一徳島町人商人諸職人之義御領分在々に罷在候とも其身次第可被召置候但子細有之は御理次第返

可被下事

一六三

一阿波淡路在々々罷越候商人諸職人之分在々々之義は不及申縦高公に罷在候ども返可被下事
 一申年以前之義に候共重科之者は御理可申進候條御渡可被下事
 一他國之者年久敷阿波淡路へ罷在申年以後御領分へ參候ども申分無御座候但理有之者之義は格別之事

一他國召連來譜代之奉公人男女に不寄申年以前之者に而も理次第返し可被下事

一自今以後御領分若此方へ走來者御座候はば宿借申候はと或死罪或過代依其輕重可申付事万一走人隱居申候候は尋に可追候條此方郡奉行手形次第宿等無異義借申彼走人相尋候様に被仰付可被下候若科人逐電否不移時刻追懸參見合候は其處へ預置重而御斷可申事

一自今以後内通仕御領分之者を呼取候者御座候はと死罪可申事

一自今以後御領分浦々々當領分之者他國へ渡海之義此方郡奉行手形無之者は不被趣様に被仰付可被下事

一自今以後御領分と此方領分と縁邊並養子等停止可申付事

右之條々被仰合趣以來互に相違御座有間敷候仍而如件

慶安二年丑五月十四日

太田 忠 助

平野次左衛門
 戸田半左衛門
 長坂三郎左衛門

鈴木伊兵衛殿
 平山 奎右衛門殿
 窪谷 作兵衛殿

右三人此方へ之書付同前に候

諸事御定十一個條覺書寫

三好郡古郷吉右衛門氏所藏
 諸書中抄出

一從 公儀被仰遣候趣相守在々所々百姓等に至迄堅可申付事

一自國他國在々々走來科人有之候へは仕置當番之家老方へ申届相談之上彼在所へ罷越家老共任指圖可申付事

一諸侍召仕奉公人知行付に不限當國之者百姓等迄不届子細有之於可行死罪如有來其主人方其方へ可相届候條意趣吟味爲差非科人は面々肝煎可相濟若主人同心無之歟又は可令死罪者相究は其

趣家老方へ可申届但巨差延仕合に付當坐に令成敗者追付可申斷之條是又家老方へ申聞指圖請可申付事

一在々百姓共出入之儀面々承届藏入分は其所代官は可令相談給知之儀は給人下代迄申聞遂異見可相添若承引於不仕は裁許人へ致内談隨其趣重而又申聞其上にても同心無之時は裁許所へ可遣然は面々異見仕通愈落著有之は公事人罪之儀は三人之者共可任覺悟事

一在々百姓出入有之節給人指出儀停止之事

一面々存寄族雖有之家老並仕置奉行人不申出儀は物毎於令遠慮且は爲を不存にて可有之條諸事存寄趣家老並奉行人致相談爲宜敷様に可申付事

一國中新儀之竹木林並新田出來之地井水川除之儀奉行雖申付面々存寄於有之は家老並仕置奉行人方へ令相談差圖を請可申事

一有來竹木林之儀奉行雖申付置存寄之儀於有之は右奉行と申談可然様可致沙汰事

一在々庄屋百姓共諸事三人申付用所若油斷仕もの於有之は面々任覺悟何分共可申付事

一國中百姓共用所申付刻面々令吟味自品仕置奉行人致相談扶持方等可申付事

一臺所方用所之義は奉行令吟味手形仕可申遣候條任其旨可申事

寛文七年六月廿七日

(御在判)

林 七右衛門とのへ

福屋 彦太郎とのへ

内海 彌五太夫とのへ

一御役仕鍛冶之義は鍛冶奉行衆被取立答公事沙汰之義は奉行衆搦せ申問敷旨寛文八年霜月廿八日於御會所主水殿へ前田伊兵衛方へ被仰渡由伊兵衛被申渡候

下屋敷横目申付覺

(候爵蜂須賀家所藏
調圖法式之冊中抄録)

覺

一公儀御法度之趣常々奉存大切鐵炮者共にも申附堅可相守若違犯之輩可爲重料事

一其方義下屋敷之横目申付條可得其意屋敷中不依上下人之善惡常に心懸見及諸事參勤之節可申聞但指急儀者國元へ可申越事

一從 公儀屋敷留守居被召出御用之儀於在之者笹部五右衛門可罷出若指合節者其方可罷出諸事五右衛門と申談可沙汰兩人不能分別儀者蜂須賀一學並上屋敷留守居之者其外何茂相談可仕附何時茂他所へ罷出節者五右衛門と替可參事

一屋敷中之者他所へ罷出砌其方相嗣其上以自筆記帳可被通旨申付條門番人に能々可申渡門番所之帳月々に引合若相連之者於在之者我等參勤之砌可申聞諸事之儀其方に相理候様申付置之條可

得其意事

一客來之砌蜂須賀一學不居會刻者其方罷出挨拶可仕尤廣間切々可罷出也附屋敷中繕普請在之節何時茂見廻笹部五右衛門と申談奉行人普請等油斷無之様可申付事

一屋敷内外番所作法等堅可申附火番之者拍子木打晝夜無油斷廻可申趣加制詞猶以其方打廻不審成者於在之者可改旨可申付事

一鐵炮者就用所門外へ參砌以札晚は六時限に出入可仕雖然我等用事言附遣之儀者可為各別事

一鐵炮者門外に宿儀尤他所人長屋に為宿儀堅可為停止若不行儀並好色之者於在之は可行罪科事

一鐵炮者小歌高聲附博奕等可為曲事事

一門番之者共被頼于人札を不改出入為致亦者内通構敷使仕儀大可為曲事尤誓紙可申付事

一近所火事之砌随分走廻肝煎可申事

右之趣堅可相守者也

寛文七年五月十七日

(御在判)

牛田又右衛門とのへ

(侯爵蜂須賀家所藏
兩國法式之冊中抄録)

覺

藏入並新開等に行申付覺

一兩國村々藏入並新開明知請定之事

一藏米麥其外雜穀品々切出之事

一於方々藏米麥雜穀代替銀子送手形に裏判之事

右之趣可相守者也仍如件

寛文七年六月廿一日

(御在判)

太田忠介とのへ

小林古兵衛とのへ

梯久左衛門とのへ

立木四郎兵衛とのへ

(侯爵蜂須賀家所藏
兩國法式之冊中抄録)

諸公事裁許申付覺